大町より濁澤へ

眼が覺めると、對山館の廣い二階も階下も、立ち動く登山者と人夫とで一ぱいになつてゐるのを見た。そのあひだを、若い主人とその弟とは、忙しく動き廻つてゐた。

祭の爲に人夫が出なかつたので、逗留してゐた客もあると聞いた。今日も人夫が不足で、後からの申込の客は、逗留するほかはないと聞いた。

『占め占め！』と階下へ行つた横山君は忙しく歸つて來て小聲で云つた。

『すばらしい案内をつかまへましたよ、北アルプスでは四人の一人で、誰でも知つてるやうな有名な案内なんです。佐藤つていふんです。』さう云つて、『昨夜の宿帳の、あれがよかつたんです。』と、やや極りの悪い表情をした。

私たちの豫定は、烏帽子から鎗へといふのであつた。昨夜、宿帳をつける時に、私は豫定といふ欄へその通りに書かうとした。

『穗高！』と、それを見てゐた横山君は、慌てて制して、鎗と書く代りに穗高と書かせた。

『穗高と鎗ぢや相場がちがふんです。鎗ぢや幅が利きませんからね。』

登山者の持つ一種のみえがさう書かせたのだと私は解してゐた。山通の横山君はさうではなかつたのだ。横山君はいい案内者を割り當てさせようとしてさう書かせたのだといふことが今になつて分つた。穗高はアルプス全山を通しての險山である。そこへ確信をもつて案内をするといふものは、大町に百人もある人夫のうちで、僅かに四人あるだけである。あはよくばいい案内者を得ようと思つた横山君は、さうした駈引をしたのであつた。

『佐藤をつかまへたつてことは、たいしたことです。山は案内次第で、船の船頭と同じですからね。』

同じやうによろこぶことを知らない私たちをもどかしがるやうに、横山君は繰返して云つた。

幾組かの客と人夫とは、主人の手によつて組合はされて出て行つた。動きの遲い時計も、もう七時になつた。

漸く案内者が私たちの部屋へ來た。からだのがつしりした、眼に角のある、一と癖ありさうなやうに見える男だ。四十を越してゐるが、日にやけた顏は、その上何れくらゐだかを隱してゐる。擧動は鈍いくらゐにまで落ちついてゐた。だが、適當な時には必ず笑顏をするが、その眼には子供に見るやうな色があつた。

案内は靜かに私たちの荷物を荷造りした。そして一つ一つ擔ぎ出した。

私たちが上り框のところへ行くと、主人は初めて私たちを知つたやうな顏をした。

『おかまひしませんでした。昨夜は人夫の驅り集めで、たうとう徹夜してしまひました。えゝと、あなた方の案内へ、もうお二方入れていただきます。今御紹介します。』

さう云ひながらも、主人は又あちらへ走つて行つてしまつた。

私たちは穗高へ登る二人の人と紹介なしに名刺の交換をした。一行は五人、人夫は七人になつた。

案内を除いた六人の人夫と、二人の新しい仲間とは、先へ出懸けてしまつた。私たちは案内と行かうと思つて、上り框に煙草をすつてゐる案内の出懸けるのを、土間に立つて待つてゐた。そこには、人夫の五六人が並んで腰を懸けてゐた。

主人は亢奮した顏をして、人夫のゐるところへ來た。そしてきよろきよろその邊を見廻しながら、

『何うもこの邊だ。たしかに手に握つてゐたから、ほかの物を持つ拍子にすべらしてしまつたと見える。』

主人のさういふのは、手傳と見える若者に向つて呟くやうに云つてゐるのであつた。手傳もきよろきよろとその邊を見まはした。

『何うしたんです、』と案内者はきいた。

『金だ。五圓紙幣で三十圓だ。かうして握つてゐたんだ。』

『ここに居たから、分らないと困りますね。』

案内の眼と、手傳の眼は、一しよに人夫の方へ走つた。と手傳は、

『お前たち、裸になつてくれ。』

『氣の毒だが、さうしてくれ。』主人も口も添へた。

人夫はいさぎよく上り框を離れて土間へ立つた。そして著てゐた腹掛を脫がうとした。

私の足もとでかすかな音がした。一人の若い人夫のからだから何かゞ離れて、そこへ落ちたのであつた。音は皺くちやになつた紙幣のかたまりになつた。

そのかすかな音は、高い音のやうにすべての者の眼をそこへ集めさせた。主人の掌はそこにゐた人夫の橫面に鳴つた。

手傳の手は人夫の胸倉をつかまへた。

『太い野郎め、警察へ突き出してやるからさう思へ。人夫つてものはお客樣の生命まで預つてゐるやうなものだ。何所の者だ、何て名だ。』

蒼ざめた色をした若い人夫は、細い眼をおど〳〵させて、片手で相手を拜みながら頰りに頭を下げた。頭をさげながらもその眼は相手から離し得ずにゐる。

『警察はよせ、』と主人は云つたが、その手は又飛んで來さうに見えた。

『まあ出てよかつた、それでないと出懸けられない。』

私たちの案內は、さう云つて、漸く上り框を離れた。

私たちが家を出ようとする時、手傳は怒つた聲を高めてゐた。

『何、今になつて覺えがないんだつて。さつき何て云つた。』

私たちはもう一度若い人夫の顏を見た。が、足は、大跨にあるき出した案內のあとを追つてゐた。

『もう八時だ。僕等が最後になつてしまつた。』

『もう少し早く出してくれるといゝんだが、大體大町はかうですよ。』

橫山君はさういつて、そのアルペンストックを路に音を立てさながら先に立つた。

路は、町から村へ、村から松林へ、松林から雜木林へと、單調に、そして暑く續いていつた。

漸く目の下に、高瀨川の流れがあらはれて來た。

その時には、私はもう一人になつてゐた。汗かきの私は、上著はとつくに脫いでゐた。今はシャツが濡れだして來た。その心わるさは自然に步調をゆるめさせたのである。

一時間に十分間くらゐの休みがあつた。その時だけ私は一行と一しよにゐた。暫くすると又離れるのであつた。

横山君は心もとなささうに私の歩み振りを見た。

『ちと怪しいな。』

『案内が悪いんだ。あゝ大跨に、すたり〳〵歩かれちややり切れない。まるで人夫の修業のやうだ。』

『あの足にや、豫定があるんですからね。』

横山君は批評以上のものを批評するやうに云ふ。

『一日に一時間餘分に懸ける氣になりや、幾らでもゆつくり歩ける。』

私はさう云つて、股引の代りに雪袴を穿いた、仁王のやうな恰好をした足の、大跨に、調子を取つて動いてゆくのを眺めた。

路は谿谷へはひつた。山は双方から迫り合つて來て、谷底に大きな流れを持ち出した。山の木は頭の上に繁つて、路の大部分を木蔭にして來た。それと共に、細い路は爪先上りとなつて來た。

日光の直射のないことがからだを樂にした。溪流の音は、深い靜寂を湧かして來た。私の歩調も遲れなくなつて來た。

案内の佐藤は、路をそれて、溪流を見おろすやうになつた、狹い平ら地へあがつて、背負つてゐた荷をおろした。人夫はみんなそれにならつた。人夫の顏には子供のやうな樂しさが浮んだ。

『晝飯にするかな。』

青草の上に着莫蓙を敷いて、足を投げ出してゐるものゝ前へ、人夫は辨當を配つて廻つた。そこには二三本の老木があつて、高く繁つた枝は十分に日光をさへぎつてゐた。溪流の音は深く沈んで、そしてその音を狹い空に反響させてゐる。周圍には一面の蟬の聲があつて、蜩がをりをり啼く。

山の冷たい水で辨當を食べてしまふと、人夫たちはみんな肱を枕にして寢てしまつた。ゆるやかな鼾きはあちこちに起つた。

今朝名刺を交換したぎりの二人の仲間の顏を、私は初めてしみじみと見た。一人は小林君といふ大阪の新聞社の記者である。三十を少し越した、好い感じを與へる紳士である。一人は堀君といふ東京の或る大學の學生で、然るべき家庭で敎育されたことをその態度の上にたゞよはせてゐる。その人たちは、落ちついた樣子をして、無心な、かすかな微笑を眼のうちに漂はせて、默つ

てゐる。横山君も本居君も、同じやうな樣子をしてゐる。そしてみんなが默つてゐる。私も、何もいふことがなくて默つてゐた。

『默つてゐるのが自然だ、』と思つた。今朝大町で見た泥ぼうも、こゝではもうかなり遠いところのやうな氣がした。これから先の山々は、今は靜かなあこがれとなつて、心に懸つてはゐるが、それはすぐこの眼で親しく見るべきものだ、想像したり、言葉とするのは勿體ない。旅を終へての後に旅の前のことは思はうとしないと同じやうに、思つて見たくもないことだ。これからみんなで一しよに同じ山を歩いて、同じ境を見て樂しむ、實際それよりほかには何もない。話題としては、それは餘りにも分り切つた、言葉にするだけの珍しさのないことだ。

僅かの疲れと汗とは、すぐに消えてしまつてゐた。みんなは滿ち足りた顏をして、ぢつとして、沈默をつゞけてゐた。

私たちと少しの距離を取つて、若い學生の五人組がゐた。私たちと同じ方向に行くといふところから、なるともなく道連れとなつて、今も一しよに晝飯を食べ、一しよに休んでゐたのであつた。一しよにといふより、その組の連れてゐる人夫が、私たちの人夫と一しよになつてゐるので、爲ようことなしに一しよにされてゐたのである。

『行かうか。』

そのうちの年長者らしい二十歲ばかりの青年がさういふと、一行は待つてゐたやうに起ちあがつて、それ〴〵リックサックを背負ひ、杖を持つて出懸けた。一行の人夫は鼾を立てゝ眠つてゐる。

『待ちきれないんだ。』

後姿を見送つて、横山君は面白さうに笑つた。

『僕等も動いてもいゝね。』

さうは云つたが、私は何うでも動かうとまでは思はなかつた。そして眼につゞいて、少し離れたところにある丈の高い山うどの葉に、日光の光つてゐるのを見てゐると、溪流の音と蟬の聲の、紛れて忘れてゐたのが又耳へかへつて來た。

進むにしたがつて溪流は廣くなつて來た。路は流れの岸になつて來た。

『家がある。』

怪しみと懷かしみのまじつた心で、私は河の向うに立つてゐる一軒の家を眺めた。それは久しく見なかつたやうな氣のするもので、又見ることがなからうと思つてゐたものであつた。

その家に向つて、こちらから橋が架つてゐた。

『休んでやつて下さいまし。』

案内の佐藤は、つゝましい樣子をして一行にいつた。

それは葛の湯といふ溫泉であつた。浴槽は、家とは反對の、私たちの歩いて來た川岸にあつた。屋根はあるが、壁のない浴槽の中に、湯に入つてゐる二人三人の首だけが見えてゐた。

その橋を引返して、河原の緣を進んで行くと、私たちは今度は吊橋を渡らなければならなかつた。

橋を渡らうとする者は、橋板を踏むと共に立ちどまつてしまつた。橋は、足の踏むとともに、全體がゆれ出した。橋板は幅が狹くて、渡りながら、足の下を走つてゐる青い流れを見なければならないからであつた。

二三人の渡つたあとで私も渡つた。

『一しよに來ちやいけないよ。』さう云つて私は渡り始めた。吊繩になつてゐる細い針金に縋つて、踏むと沈み、進むと浮き上がるからだを保つた。それでも、腰はおのづから屈んだ。

今一つの橋が私たちの前にあらはれた。それには吊繩もなかつた。

一人、一人渡つた。最後になつたのは、人夫のうちの年長者の五十ぐらゐに見える、圓顏な、眼の細い、いつも笑ひを浮べてゐる男であつた。その人夫が中ほどまで渡つた時に、橋のあちらへ二人の釣竿を肩にした男があらはれた。二人は一しよに、眞つ直に立つて大跨に渡つて來た。橋は流れと空のなかに波を打ち出した。私たちの人夫は、腰を据ゑて、走るやうに、ゐざるやうに動いた。その圓顏は赤くふくらみ、細い眼は据わつて、怒りに燃え出した。人夫が橋を離れた時には、その背に接してゐた、岩魚釣の男はつと川下の方へ行つてしまつた。

眞つ白い泡を立てつゝ藍に流れてゐた高瀨川が、半分だけ濁りだすところへ來た。一つの濁り水の支流が流れ込むからであつた。案内は、その支流の方へ、林道に沿つて曲つた。

七八間もあらうと思ふ高い岩から、赤く濁つた瀧の落ちて來るのを見た。炭燒小屋があつて、二三人の男が炭竈の前に立つて、川越しにこちらを眺めてゐるのを見た。路は絶えて河原を傳つ

た。

前面に、きつ立つた青い山を見た。振り返ると、後方もきつ立ち、重なり合つた青い山となつてゐた。花崗岩の白く光りつゝ廣がつてゐる河原の上を、赤く濁つた水のうねつて流れてゐるのが、むしろ奇怪な感じを與へた。

空氣は急に冷えて、そこに澱んでゐるやうに感じられた。

案内は立ちどまつて荷をおろした。テントを背負つてゐた人夫は、第一にそれを張り始めた。

『こゝが濁り澤ですか。』

横山君が尋ねると、案内の佐藤は、

『えゝ』と微笑して見せたが、振り返つて人夫に、短い、分らない言葉で、何かの用を命じた。

烏帽子岳の登り

濁澤の露營地の夜が明けた。

テントを這ひ出すと、人夫は河原で火を焚いてゐる。流れ木を拾ひ集めて來て、よく燃えると喜んで焚いてゐるのであつた。誰の顏にも、朝の輕い快さが漂つてはゐるが、しかしそれは、勞働者の勞働にかゝる前暫くの休息を樂しむ時の顏以外の何ものでもないのがありありと見える。

私は自分の寢たテントを見た。三角の、小さい、三四人の者が寢るには小さ過ぎる程の貧弱なものである。河原の石ころの上に、平みついたやうになつてゐる。子供のおもちやのやうに見える。『昨夜(ゆふべ)は寒かつた、肩の邊へ雨がかゝつたやうな氣がする』と、夢を思ひ出すやうに思ひたつた。私は手を伸べて肩を撫ぜて見た。濕り氣の殘つてゐるのが、手先に感じられた。すると、亢奮した感情が隱れて、わびしい氣が、代りに强く現はれて來た。

顏は洗はうとして見ると、川の水は赤く濁つてゐる。濁澤といふ名を負つてゐる水である。昔からこの通りに濁つてゐるのであらう。

まづい飯を食べた。食べてゐると、大阪の學生の一行は、もう出懸けて行つた。人夫を後に殘して、自分たちばかりで。

遠足に連れられて行つて、先生を邪魔がつてゐる小學生のやうだ。私はさう思つて川原の上を遠ざかつて行く後姿を見送つた。後姿を見送りつつも、心はいつか自分に復つて來てゐるのに私は心附いた。そこには躍らない、躍ることを望みつつ躍りえない心があつた。

翠の山は、極めて薄い靄をまとつて、そのほの白さを融かし込んで、青黑くなつてゐる。その青黑い面の上の空は見えない。河楊の葉が、青く、ほの白く、水音のなかにゆらめいてゐる。鳥の聲はない。

さわやかだといふには、重く沈んだ、陰鬱だといふには力のあり過ぎる光景が、私を包んで來た。

私は煙草へ火をつけて、靜かにその邊をあるいた。

『靜かに……』横山君の聲で後ろから云つた。振り返つて見ると、寫眞機で私の後姿を覗つてゐるのであつた。

人夫を先に立てて、一行一列となつてあるき出した。

今日は一萬尺の高處まで、それから三日間をあるき續けるべき一萬尺の地盤へ、一氣に登つてしまふのだ。それが私の胸へ懸つて重くぶらさがつてゐた。私の注意は脚へ向つてゐた。脚力を惜しんで、それに堪へきらなければならないと思ふのであつた。

路は直ぐに河原を離れて、山裾にかかつた。そこには狹い、案內者だけが知つてゐる路があるだけで、展望は全く山肌と木立とに遮られてゐた。

水の音が聞えて來た。瀧に似た音である。それは珍しい、そして寂しい響となつて擴がつてゐた。

道を反れて、そちへ行く者がある。私も跡について行つた。

絕壁の上から、瀧が落ちてゐるのである。水量は多くはないが、高さはかなりまであつて、瀧といふに足りる。だが、こんな瀧が、こんな醜い瀧が、この外の何處にあらう。その水は、赤濁

りの、泥を溶かしたやうな水である。

『これが濁澤の水を濁らせる支流だ。』

誰かがさう解釋した。それに相違はない。しかし、これに對して、解釋が何の役に立つ。瀧は醜い。見てゐると、本來醜いものの醜いのよりも遙かに醜くて、そして見てゐる者の心を寂しくしなくてはやまないではないか。

私は暫く我慢して見上げてゐて、引つ返して來た。

幾らもあるかないうちに、私はまた一つの格別の光景を見た。

私たちの前にはやゝ廣い溪流があらはれた。その溪流は、ただ一部があらはれてゐるだけで、水上も、川下もなかつた。また對岸もなかつた。すべては、深い木立に蔽はれた峻しい山ばかりである。溪流の向ふの緣に、緣とは云つてもう山の峻しい傾斜になつてゐるところに、小屋が一つあつた。そこに、黑い筒袖を着て、頭を手拭で包んだ、注意して見て初めて女と分る人が、その小屋の入口のところに、向うむきに立つて、何か着物めいたものを干さうとしてゐた。

眼を移すと私は、一人の男を見た。それは家からやゝ離れた、河岸のところに立つて、手を後ろで組んで、ぢつと私たち一行を、溪流越しに眺めてゐるのであつた。同じく筒袖を着て、股引を穿いて、頭は露出してゐた。延びた髮の毛と、髭とは一しよになつて、青黑い顏いろをしてゐた。面ざしの柔和なのと、中年の者だといふことは感じられるが、幾つくらゐだといふやうな微細なことは、その顏は語つてはゐなかつた。しかしその男が、たまたま見かける私たち一行といふ人間に、或る興味を感じて見とれてゐるのだといふことだけは、明らかにその姿勢が語つてゐる。

『こんな所に人が住んでゐる』と私は第一に思つた。昨日の朝大町を離れて以來、私たちは、自分等以外の人間としては、葛の湯の附近で見懸けたきりである。それ以來は全く見ない。又、見られないもののやうな豫想も持つてゐた。それが、男と女と、家を持つて住んでゐるのを見懸けたので、變な、不思議にも似た感を起させられたのである。

さう思ふと共に私は、それよりも一層强く、『人間といふ奴、何てみすぼらしい、寂しさうな恰好をしてゐるものだらう』と思ふのであつた。

人間に取つては、人間ほどなつかしいものはないが、時には、人間ほど忌やなものに見えるも

のはない。第一、あらゆる生物のうち、人間といふ生物の生存狀態は、他の何よりも一番無力だ、一番不備だ。それでゐて、生存慾の何よりも、一番强いことを、ありありと、あからさまに見せて、そしてそれを誇としてゐる。狡猾の程度が、人間の大小を計る標準のやうにもなつてゐる。我々の平生見てゐる人間は殆どそれで、それ以外にはないとも云へる。しかし、これはこれで他の見た目のいいやうに恰好を附けることを知つてゐる。附けた恰好ではあるが、それが本體であるかのやうにごまかし合つて、又承知の上でごまかされ合つてもゐる。

この夫婦の狀態は何だ。ここには無力があるだけで、ごまかしさへもない。無力どころではない、無力を無力とする意識さへも失つてしまつてゐる。生存慾があるかないか聞いて見ないと分らないほどである。

人の心は分らないものだといふ。慾望を絶した境に、本當の生存を樂しむ心が湧いて來るといふ。それも察し難いことではない、多少の體驗がそれを承認してもゐる。ここにも、この狀態にも、樂しみがないと何うしていへよう。自分だからとて、今は心の一方で絶えず孤獨を慕つてゐるではないか。周圍を小さく考へることによつて、心の自由を多少なりとも得て、それを喜びとしてゐるではないか。

『何だつてあの男、なつかしさうに我々を見てゐるんだ。何だつてあんな、寂しさうな、いくぢのない恰好をして見せるんだ。よせ、引ッ込め。』

私はさう心のなかで罵つた。罵つてゐると、おのづと涙ぐましいやうな氣になつて來た。

青黑い柔和な面ざしをした男の額に日光があたつて黃いろく輝いてゐたその顏が、私の眼にいつまでも殘つてゐた。後ろで手を組んで、やゝ小腰をかがめたやうにして、そしてぢつと動かずにゐた恰好が、それと共に浮んで來る。青葉の日に照つて、しんとしてかがやいてゐるなかをあるきつつ、私は瞥見したその男をいつまでも眼の前に見せられるのであつた。

路は急に登りになつた。それはすばらしい、類のない、峻しい登りである。私は登るべき山の面を仰いだが、それは反りかへつて見あげるほどの峻しさで、そして、山の上の空は、背後の方に小さく見えてゐるだけであつた。

『これを登るのか知ら』と私は心のうちで嘆息した。しかし、苟くも足の懸り、身の縋るもののあるところは、何んなところでも登りえられるものだといふ自信を私は持つてゐる。嘆息の奥か

ら、自信は眼をかがやかしてゐた。

私と一しよにゐた者の、誰も何も云はない心を私は感じた。

『えらさうだね、』と私は笑つた。『とにかく、夕方まであるくんだ。』

夕方まで、あるくことを然事に。全くさうだ。さう思つて私はゆつくりと足を移し出した。

路は、何の目じるしもなかつた。それは、一面の夏草の茂りで、土といふものが見られない狀態になつてゐたからである。その夏草も、概して丈が高かつた。山うど、この邊に一番よくある、枝と葉を茂らせてゐる山うどは、足を踏ませなくした。案内者は、その上を、大跨に、のそり、のそりと、踏みしだいて登つて行つた。それは、感で、路のあるところと直覺して進むやうにも思へた。でたらめにあるくやうにも思はれた。

『もう少しゆつくりあるいてくれるといいが。』

私はさう思つて、案内者の後姿を眺めた。背中に荷をしよつて、屈み腰になつて、腰で調子を取つて、のそり、のそりと動いて行く恰好と速度とは、一つの機械のやうな正確さをもつてゐた。廣い肩幅と、雪袴からもれて見える股の邊の骨組は、何れほどの强さを持つてゐるものか分らなく思はれた。關係なく見てゐたら尊いものに思はれるやうなその體も、同行者となつてゐると、むしろ憎さを感じさせられた。

『おくれると路が分らなくなつてしまふ。』さう思ふ心は、同行といふよりは、引つぱつて行く者となつてゐた。

私は少し歩き出した時には、もう蒸されるやうで、上着は着てはゐられなかつた。脱いで、腕に抱へてゐたが、登りにかゝると、それも重くて堪へられなくなつた。で、人夫の一人に、荷の上へつけてもらつた。今は、汗が流れて、顏のは拭きもするが、背中のは、つめたく、たらたらと傳つてゐるのが感じられて氣味が悪くなつた。呼吸は苦しくなつて、自分の身邊には、自分のつく荒い息だけになつた。堪へようとする努力はすぐに續かなくなつて、今は痩我慢が何所までつゞくかといふ興味になつて來てゐた。

路は木蔭に入りかゝつた。先に立つてゐる案内者は立ちどまつて、續いてゐる人夫を振り返つて見て云つた。

『一服やるめえか。』

人夫は默つて、しかしほつとしたやうに息杖を荷の下にあてがつた。

人夫は荷をおろしたが、それを立てておくだけの、一尺四尺の平もそこにはなかつた。腰をすゑるに足りるほどの場所もなかつた。私たちは、草の葉を敷いて、尻のすべるのをうるさがりながらも休んだ。

私は苦笑の湧くのをとどめ得なかつた。それは、案内者の問題としてゐるのは、自分の連れてゐる人夫の肩である。彼はそれをいたはらうとしてゐる。しかし、私たちの足は問題としてはゐない。がそれは、間違つてゐるとはいへないことだ。案内者に取つては人夫は、永く一しよに暮すべき仲間である、私たちは、多分一遍きりの、通りがゝりの旅の者である。それとこれと、義理合ひの上では比較にはならないわけである。

『地方人つて、みんなこれだ。』と同じく地方人である私は思つた。そして獨りで唇をゆがめてゐた。案内者は私たちに云つた。

『水は、もう此處つきり、頂上までありません。そこの澤が別れです。』

案内者はさう云つて、飲むなら飲んで來いといふ顏をして、手の平へ煙草の吸殼を拂つた。

山馴れてゐる者は、水なぞ滅多に飲まない。人夫は殆ど絶對に飲まない。私たちの仲間のうちでも、やゝ脚に應へのあるものは飲まないやうだ。大阪の學生、それに私など、一行のうちで、水と見れば飲みたがる手合ひだ。

學生は、眼で敎へられた澤へ走つた。私も跡からついて行つた。

急な傾斜を傳つて、山の清水が、青葉のなかから、碎けつつ、きらめきつつ落ちてゐる。山うどの葉、薄綠の葉など、その雫にぬれてゐる。繁く立つてゐる常盤木は、その澤水を蔽つて、涼しいといふよりは、むしろ陰氣な氣をそこに湧かしてゐる。

私は腰にさしてゐた柄の附いたコップを手にして、常盤木の枝に片手を縋らせて、その清水を汲んだ。ここきりもうないといふ山の清水は、乾いてゐる喉へつめたく、氣持よくしみた。

路は陰氣な木立の下を縫つた。それも離れると、短い雜草だけの、日光にきらめいてゐる山腹が、頭の上へ伸び出した。

そこは、眞つ直な上りであつた。私たちは完全な一列をつくつて攀ぢ登つた。極めて峻しい上りは、足の强弱にかゝはらない。私たちは、いつも列をくづさずに登るのであつた。

そこは、足でだけ登るところではなかつた。足だけでは身を立ててゐることすらできない。身を持ちあげるには、何うでも、手で何かに縋つて、その助けで足を上げるのであつた。私たちは文字通りに、攀ぢのぼつて行くのであつた。

地肌に平み附いてゐる私の頭のところには何時も前に進むものの草鞋があつた。時々、その前の者の足のあがりの遲れる場合には、私の伸べた手は、何をでも摑まうとしてゐる指先は、その草鞋をさへ摑まうとするのであつた。時には、前の者の草鞋の下から、石の缺けの轉び出ることがあつた。しかし、それが私の頭にあたるには、餘りに近過ぎた。轉ぶ石は、私の頭を過ぎる時には、まだ跳り出すだけの力を持たないのであつた。

物に縋りつつ、私は眼を後ろへ走らせた。草鞋と頭、草鞋と頭、その同じ繰り返しは、鎖を見るやうであつた。それはいたはつて見るには、恰好が餘りにも滑稽に見えた。笑はうとするには、その恰好が餘りにもばかばかしく見えた。

そんななかでも横山君は、列を離れて、寫眞機を一行の後姿に向けてゐるのであつた。その覗つてゐる眼つきを見ると、私は笑ひ出した。横山君も笑顏をかへした。

私たちは又、森林帶へ入つた。それは長く、陰氣であつた。或所で休んだ。そこには、樹は殆んど樅や栂だけのやうに見えた。幾抱へもあらうと思はれる、暗い肌をした樹は、山の樹に通有な、その幹を一樣に傾けて立つてゐた。私たちの見おろす眼には、暗綠の、日光を完全に遮ぎつてしまつてゐる針葉と、その棄かげの、薄暗いなかに立ち重なつてゐる太い幹の亂ればかりであつた。私の側に、たゞ一ぽん、桂の大きな木が、その丸い、綠青いろの葉を茂らせて、周圍との對照から、青い、高雅な、或る光耀體のもののやうに見えるのであつた。迫つた呼吸がしづまり、汗が額から乾かうとする頃には、朽葉と濕地とのさみしいにほひが感じられ出して、それが次第に濃く、そして寂しい氣分を湧かせて來た。

森林帶の路はうねりうねりした。ふと私は、眼の前に日光の耀いてゐるのを見た。なつかしい、樂しい、明るい日光は、山の一つの出鼻の、維木と草だけの上に耀いてゐるのであつた。そこへ來ると、人夫は、案内者の言葉も待たずに荷を背からおろした。辨當をしよつてゐた人夫は、いそがしくその包みを解くと、他の人夫は、藥鑵を提げて、一方の樹かげの薄暗い方へと下りて行つた。

辨當を食べて、水を飲むと、人夫は草の上へ、ごろり、ごろりと寢た。間もなくそこには樣々の鼾きが聞え出した。

辨當を食べながらも、私は山上の展望をたのしんだ。私たちのゐるところは、まさしく山の中腹にある一つの出鼻で、眼の下には、山裾があるはずである。が、それはやゝ廣い谷に過ぎなかつた。前面には、幾つかの峰が立つてゐて、近いのは濃い綠を、遠いのは薄い綠を捧げてゐた。空は著しく靑さが薄らぎ、そして澄んで來てゐた。

その空と山と接しゐるところ、山の空に浮べるやはらかな肌、そのもつれ重なり、その廣く大きく、同時に纖細な趣は、捉へ難い、そして飽かない趣である。私はそれに見入つてゐた。疲勞は、私の體を厭して、頭まで暗くしようとした。私は見てゐるものがいつか、その魅力を失つて來るのを感じた。が、さう思ふと同時に、それは又新らしい力を甦らせて來た。

『あの邊が大町です。』案內者はさういつて、山と山とのあひだを指ざした。その眼にはなつかしさがあり、その口調には、或る熱意があつた。

『さうかねえ』と私は答へて、指ざされる方ゐる見た。方角が思つたとは大分ちがつてゐる、私はさう思ふだけである。大町は私に取つては何の魅力もない土地であつた。

山の出鼻の盡きるところに、一ぽんの大木の、立枯れて、白く晒れた木肌を空に浮べてゐるのがあつた。それは奇怪な印象を與へてゐた。その木のてつぺんに、鴉に似た大きな鳥が一羽來てとまつた。すると何所からか、又一羽來てとまつた。それは山へ來て、私の初めて見かけた鳥であつた。

私はめづらしい氣がして見上げてゐた。

『鴉か知ら。』

『ちがひます、岳鴉といふんです。』案內者は敎へる口調で云つた。

岳鴉は、鈍い、そこに人の大勢ゐるのを認めないやうな樣子をして、一つの枝から他の枝へと體を移してゐた。たまに、鴉に似た啼き洩らした。

『蓄生』若い一人の人夫は、さういひながら、それを目がけて石を投げた。石は線を描いて谷へ落ちた。岳鴉は平氣でゐる。彼は又投げた。やはり同じだ。たうとう彼は、その白枯れの木の下まで行き、木の上の岳鴉を見上げて怒鳴り出した。岳鴉はやはり平氣でゐた。

人夫は根氣がつきて引つ返して來た。すると岳鴉は初めて木を放れて、あなたの木立の暗い方へと飛んで行つた。

長い休息で、疲勞はほゞぬけた。日光に照りつけられる青草のにほひは、重苦しい、わびしいものになつて來た。私は心持が少しいら〳〵して來た。が人夫の斟きは安らかに續いてゐた。

一行が眼ざめて、荷をしよつて、ゆつくりと歩きだしたのは、一時ずつと過ぎ、二時近い時であつたらう。退屈氣味になつてゐた私は、歩くことが樂しかつたが、しかし何のやうなところへ連れて行かれるのかと思ふと、同時に氣が引き締まつて來た。

案内者は、森林帶のなかへ導いて行つた。あたりは薄暗かつた。眼をあげると、常盤木の頂に光線の青い亂れを見ることは出來た。だが私たちは、足を出す毎に脚もとに注意を拂はなければならなかつた。私たちは全く展望を奪はれてしまつたのであつた。

展望の伴はない歩みは、單なる歩みである。歩むと共に、その歩ゆみをさへ忘れてゆく歩みである。ただ苦しい歩みである。

岩石の群がりのなかへ路がうねり入つて、岩にすがり、身を斜めにして、一歩一歩と辿り出した時、これが何れほど續くのだらうとやゝ不安を感じ出した。そして振り返つて見ると、私たちの人夫のうち、かなり年寄つた、小柄な、眼の細い男の、裸になつて、その痩せた背中に荷をしよつて、見るからに苦しげな風をして、遲れて登つて來るのが、薄暗い岩のあひだに見えた。私は眼をとめてその姿を見た。すると、それよりも後になつて、今一人の、宮角力を取つてあるいてゐるといふ、肥えた、兵隊あがりの人夫も、同じやうに裸になつて、しきりに眼ばたきをしながら、雜木のあひだからその顏を出したのを認めた。

『連中、案外苦しがつてゐる、』と思つた。『尤も荷はあるんだが、これだと路の相場も大凡そ分る』といふ、安心に似た氣がした。

路は森林帶を離れて、大きな岩の下に出た。案内者は足場を搜してその岩に登つて行つた。私も續いた。岩を登りきると、私は何物かに輕く顏を打たれたやうに感じた。私はせはしく前面を見まはした。眼界は俄に開けて來た。そこにはもう森林も、一本の木立もなかつた。見るのは、赤く黃いろい斷面であつた。一つの大きな山の一面が、全部斷面となつてゐるのであつた。その斷面には日光が直射してゐた。空ともつれて青白く射して來る光線が、そこでは赤く黃いろく、

ぎらぎらと渦卷いて亂れてゐた。

物すごい感じのする斷面を眺めながら私は案内に、

『えらい所だね、』といふと、案内者はにこにこして、

『大崩れつていひます』と答へた。

案内はその大崩れの緣にあたるところを、岩から岩へと縫つて登つて行つた。

白樺に似た雜木林があらはれた。

『山樺つていつてゐます』といつて、案内はそのあひだを分けて登つた。山樺の林は直ぐに盡きた。私の眼の前には、木立のない山の一部があらはれた。

『頂上だ。』と私は直覺した。『案外ぢきだつた、』と、嬉しい、といふよりも安心に似た感がした。

『すばらしい木だ、』と私は眼の前に聳えてゐる一本の山樺の木立をあふいだ。それは一と抱へにも餘らうと思はれるほどの大木である。一つの崖の上の危いところに、その根を蟠らせてゐるのであつた。

その木の下まで行くと、私は立ちどまつた。捨てておけば踉いて來ると思つて、强いて心から放してゐた連中を、今はここで待たうと思つたのである。

案内者は、前方に向いたまゝ、そこに立つてゐる雜木林の蔭の方へまがつて隱れて行つた。路は下りになるらしく、下つたところが露營地であるらしい。

その山樺と雜木林とのあひだに、私は高山植物の一かたまりを發見した。それは丈一二寸位の、葉は檜葉に似たもので、簇らがつて、ぎつしりと生えてゐた。それには、黃いろい雫のやうな花が、撒きちらしたやうに附いてゐた。注意して見ると、雫に似たのは蕾で、開いたのは五瓣の、梅といふよりも櫻に似た形をしてゐた。青いなかに、黃いろい、やゝ乳色を含んだ花の、土の上へ平みついたやうに咲いてゐるのは、上品な、いたいたしい感を起させた。

その花のところに暫く立つてゐると、横山君の、さも勞れたやうな、しかし事もなげに笑顏をつくつた姿の、山樺の下に現はれて來たのを見た。續いて本居君の、幼げな驚きを見せた顏があらはれて來た。こちらはさう疲れてゐるやうには見えなかつた。

『まゐつた！』と横山君は投げ出したやうに云つた。そして、一しよに來た人夫は足を止めずに、雜木林をめぐつて行くのを見ると、横山君も、一氣に、行くところまで行つてしまはうとするや

うに、後に續いた。

雜木林のあひだを下ると、そこは一面の草原であつた。三方は傾斜に圍まれて、一方だけ遠く開けてゐた。そして其方には、幾つもの峰が空に浮んでゐた。峰のある方が、此れから私たちの辿つてゆくべき尾根だといふことが察しられた。

案內者と、先へ行つた人夫たちは、もう草原の一點へ、しよつて來た荷物を下して、立つたり坐り込んだりしてゐた。廣い空と、遠く開けてゐる尾根とは、その一團の人たちを、小さな、寂しいものに見せた。

私は立ちどまつて、續けて周圍を眺めてゐた。空には太陽がまだ高かつた。そして雲は一と片もなかつた。空氣がかなり稀薄になつてゐると見えて、空は晩秋か初冬頃のやうに、薄青く澄んでゐた。光線も、太陽といふよりは、むしろ月光のやうな、淸らかな、靜かなものであつた。草原には短い草が生えてゐて、ところ〴〵白い花がこぼれたやうに咲いてゐた。しかし、そこにゐると、私の眼は空にばかり捉へられがちになつた。

それでも、私は、私たちのゐる山と、谷を一つ隔てて相對してゐる一つの大きな山にはおのづからに眼が行つた。それは全體に褐色をした、といふよりは赤味の勝つた山であつた。その色は無論岩の色である。この赤い岩山は、縱に、限りないまでの襞を持つてゐた。襞はことごとく雪に埋められて、ちやうど鋭い刄物のやうに見えるのであつた。

今一つ眼の行くのは、私たちの露營地から遠くなく、一つの傾斜の裾にある雪溪である。かなり大きな雪溪は、日光を受けて、眞つ白に、冷たく光つてゐた。

露營地には第一に火が燃え出した。汗に濡れたシャツは、歩みを止めると共に肌に冷たく感じられて、私は火の戀しさを思つてゐたので、急いで火の側へ行つた。

焚火をするところは、前からその爲に設けられてゐた場所であつた。そこには、古い燃えさしの薪などもあつた。

『いつ焚いたものだらう?』

私は太い薪の燃えさしを足で動かしながらきいた。

『今年はまだ誰も來ませんから、去年のものです。』と案內者は云つた。

去年、誰かがここで火を焚いて露營をしてそれきり誰もここへは來ないのか。私は兩

手を火の上に翳しながら、そんなことを思ひながらも空を眺めた。悠久な、寂しく清い感が、胸にしみ入るのを覺えた。

烏帽子岳の頂上

眼が覺めると一しよに、私はテントから這ひ出した。着ものは夜も晝も一つものである。着がへといへば、靴下を脱いで、甲掛足袋と草鞋とを穿くだけであつた。

昨日、朝から夕方まで、殆ど四つ這ひになり通してこの烏帽子岳の乘越まで登つた、その疲れはほゞぬけてしまつてゐた。寢しなには、『眠れるか知ら……』とあやぶんだが、氣を落ちつかせてゐると、いつか寒さを忘れて眠つてしまつたらしく、今は、眠の足りたあとにだけ感じる一種の快ささへある。

三つのテントの側に、それ〴〵焚火をしてゐた。人夫が朝飯の用意にかゝつてゐるのである。私たちの側には、三人の人夫が火を焚いたり、鍋をあつかつたりしてゐた。案内はまだ起きて來ないらしい。『お早う、』といつて私は焚火の側へ寄つて行つた。太い枯木と偃松との積み重ねは、

煙りながらも赤黑い炎を吐き立てゝゐる。

『お早うござんす。』と人夫は笑顏で迎へながら、簡單に挨拶をかへした。

『寒いね、』と私は双手を火の上に翳して暖まらうとした。

『えゝ、でもお天氣で何よりです、』と年寄の人夫は、その細い眼に嬉しさうな笑みを浮べながら云つた。

『降られちや大變だらうね、』と、私は昨日の登りを思ひ出した。

『そりや話になりません、全く命懸けですからね。』

さう云つて人夫は何か話し出しさうにしたが、眼が鍋の蓋に動くと、慌てゝ、燃えあがる炎のなかに手を入れた。その手は鍋の蓋を取り上げた。鍋のなかには米が煮え立つてゐたが、そこには細かい炭がかなりまじつて一しよに躍つてゐた。

私は朝の習慣になつてゐる煙草へ火を移した。そして、

『これから出懸けるまで何をしよう…』と思つた。煙草をすひながら次ぎにすることを考へる、これは私が、昨日からの經驗で覺えさせられた、この旅での樂しみの一つである。

私のやうな足弱は、案内に歩き出されたが最後、餘裕と云ふものは全く奪はれてしまふ。遲れまい、一行の厄介者になるまいと思ふと、歩行三昧になつて、一歩々々に、心身の全體を集めて、弛みなく、しかしゆつくりと歩くより外はない。その時には殆ど外界との交渉を持つことはできない。眼をやつたら離すに惜しいやうなもの、餘裕があつたらそこに坐り込んでしまふやうな場所が、限りないまでに續き擴がつてゐると思ひながらも。

それに案内は、朝と夕方と晝飯後とは、ゆつくりと休むものだといふことを知つた。今も、これから出懸けるまでには、少くとも二時間くらゐの時間はあるはずである。

『何をしよう、この自分の自由に樂める二時間の時間を。』

しかしそれは、實は考へて見るまでもなくきまつてゐることであつた。昨日の夕方、平地から始めてこの山の乘越に登つた時、その快さに乘せられて、私は勞れてはゐるが一と思ひに烏帽子岩まで行つて見ようかと思つた。そして案内に相談すると、『朝になすたがいゝでせう、』と止められたのであつた。今朝は何うでもその烏帽子岩を見なくてはならない。

『こゝからは見えないが、見當は附いてゐる。一人で行ける。いや、一人でゆつくり行つて來よ

う。』

私は焚火から離れた。すると仲間の本居君の、すぐ向うの小高い傾斜の上に立つて、あちこちと見廻してゐるのを認めた。私がそちらへ行くと、本居君も歩み寄つて來た。

『昨夜は眠れたかい？』

『いや、眠れませんでね、』と本居君は、癖の、眼に陰鬱な色を浮べて答へた。

眠るといふことは、私たちにとつても大事件であるが、私よりも山馴れない、この年下の友だちに取つては一層の大事件に感じられた。

『今朝は早く起きてしまつたが、いや、いゝ月でしたよ。もう頂上のはうへも行つて來ましたよ。』

九州に育つて、山らしい山へは登つたことのない本居君は、大町から見える小高い山を、端から名前を尋ねて困らせた。あれほどの山は名を持つてゐないといふと、不思議なやうにしてゐた。この烏帽子の頂上に對して、今何んな感じを起してゐるかは、私の思量の外らしい。

『頂上まで行つたのかい？』

『行きましたよ。高山植物が何とも云へませんね。ずつと向うのはうに、槍ヶ岳のやうな山が見えましたが、あれは何ていふんだらうな……』

『僕も行かうと思つてゐるんだ。』

『何ならもう一度行つてもいゝ。』

『顔洗つた？』

『えゝ。』

『僕も顔洗つてにしよう。』

さう云ひながらも私は、そこに本居君と一しよに立つて、周圍の展望を始めた。

藥師岳、それが第一に目に着く。私たちのこれから縱走しようとしてゐる山脈は、この烏帽子を起りとしてゐるが、藥師のあるのはそれとはちがつた山脈で、こちらと平行してゐる。そして深い谿谷を隔てゝ、その全容の望まれるだけの距離を持つてゐる。

昨日の夕方、初めてこゝへ來た時、途中から同行することになつた大阪の新聞記者で、登山家である小林君が、

『藥師！　何て大きいでせう！』と感嘆の聲を放つて見とれてゐたのが思ひ出される。その時に

藥師には、夕雲のちぎれがまつはり着いてゐた。今は、一ひらの雲もとゞめず、輝きを含んだ青空の前に、その全部をあらはしてゐる。それは茶色を持つた岩山である。誠に、大きいといつて形容する外、云ひ方のない山である。限りなく襞を持つた、襞毎に雪溪を持つた山である。襞と雪溪とは、互に輝き合つて、一部々々變化を保ちつゝ、全體としては強い落ちつきと安らかさを持つた山である。

私の眼は、これから向つて進んでゆくべき山脈のはうへ移つた。

それは藥師を持つた山脈と、燕、常念などを持つた山脈とのあひだに挾まつて、一萬尺に近い峰の幾つもを持つて、遠く南へとうねり伸びてゐる山脈である。私たちの踏んで行くのは、その兩側に何千尺と、千尺を單位にして數へるべき谿谷を持つた、高まりつくした頂上を貫いてゐる一線の上である。

『野口五郎は何れだらう？　赤岳は？』と心のうちで思つた。それは二つとも今日越すべき山である。だが私の眼に入つて來るのは、茶いろに輝いてゐる山肌が、そのところ〴〵に黑い色を班らにまじへて、高く低くうねつてゐるだけである。そして、それを越したあなたには、さま〴〵な形をした山の頂上が、その頂上を空の上に浮べてゐるだけである。その頂上の、輝きの強いのは近く、弱いのは遠いと思はるだけで、そこに何れだけの距離があるかの見當もつかない。

『あの山がみんな、この自分の草鞋の底に續いてゐるのだ。これからあの上を通るのだ。』

さう思ふと私は、心が張つて來るのを覺えた。それに對して輕い心を動かすのは、憚るべきことのやうな氣がした。

私は振り返つて、眼に返い露營地のはうを見た。テントはまだ手が着けられずに、昨夜のまゝになつてゐる。焚火は燃えてゐる。人夫と一行の者とは、それ〴〵のことをしてゐる。二三の人夫は、テントの向うの、やゝ低くなつたところの雪溪のところへ行つて屈んでゐる。一人の人夫は、藥罐に水を汲んで、それをこぼすまいとするらしい恰好をして上つて來る……。さうした光景が全體となつて、すつきりと見えてゐる。

それを見てゐると、私は一種の氣分に捉へられて來た。それは、からだのひどく勞れた時に、ともすれば起る、人を厭はしいものに感じて來るのと似てゐた。しかし、さういふ時には、こちらから人を避けたくなるのであるが、今は、それとはちがつて、そこに見えてゐる人も、見てゐ

る自分も、云ふべくもない醜い、値ひのない、こゝにかうしてゐるのが不適當なものに感じられて來たのであつた。私はこの思ひ懸けない氣分に捉はれて、暫くその光景を眺めつゞけてゐた。

『とにかく、顏を洗はう。』

私はそこを離れた。そして焚火の側を過ぎつて、雪溪のはうへ行つた。

雪溪は、緣のところだけ雪が溶けて、淺い池のやうになつてゐた。生えたまゝ枯れてゐる草の葉や、こぼれた米などが底に見えた。手をひたすと冷たくて、まさしく冬の水だつた。

焚火のところへ歸つて來ると、案內は起きて、火にあたつて煙草をすつてゐた。

『頂上へ行つて來ますよ。』

『飯をしまつてから入らしたはうがいゝでせう。』

案內はおだやかには云つたが、私を見上げた眼には、明らかに命令する色があつた。私は默つて隨はざるを得なかつた。

山の食事が始まつた。焚火をめぐつて、土の上へ胡坐をかいてする食事である。本居君と私とは適當な食器を用意することを知らなかつた。二人はいつも、アルミニユームの小さな水飲で、飯も食べ味噌汁も吸ふのであつた。

飯が濟むと、私はすぐに頂上へ行かうとした。

『行かない?』と私は橫山君に勸めた。橫山君はそろ〳〵登山家のうちへ數へられようとする人で、私たちを連れ出した人である。

『僕は……』と、橫山君は若い顏に極り惡るさうな笑みを漲らして、拒絕の意を示した。

本居君はと見ると、何所へ行つたかもう見えなくなつてゐた。

私は一人で出懸けた。

露營地とそちらとのあひだには、岳樺の低い林があつた。そのなかの傾斜の急な細路は、露にぬれた草で蔽はれてゐた。林の下生えの草は、雨のあとのやうだ。林を拔けると、すぐに山の脊梁である。おぼろげな、しかし間違はせない一すぢの線が、眼をとめて見ると認められる。

脊梁のあちら側には、高山植物の密生した一區劃がある。それは昨日見て、立ちどまつて見たものである。丈の一二寸ほどの、檜葉のやうな葉をした木に、薄黃な花が、蕾は大きな雫のやうな、開いたのは櫻のやうな形をした花が、一面に群らがつて、そして露に濡れそぼつてゐる。

その下には、昨日その一角を掠めて登つて來た大崩れが、山腹が崩れて、山の腸ともいふべき岩の積み重ねの、亂雜に露出してゐるのが、眞つ直といふよりもむしろ、剜り込んだやうになつてゐるのが見おろされる。白い、茶の岩肌は、靜かな、しかしそれ〴〵の光をあらはして、三百尺、五百尺と續いて、下は一つの色に煙つてゐる。その谷を隔てゝ、唐澤山と饑鬼岳とは、一つは高い峰を、一つは長い、きだの多い峰を捧げてゐる。綠の山は、今、薄い靄を帶びて、濃い、しかし柔らかな靜かな色をしてゐる。

昨日見たこれらのものゝ、今重ねて見て、ちがつた美しさをあらはしてゐることが、妙に親しい感じを起させた。

『あの大きな白樺は？』

さう思つて私は、歩みを移してそちらを見た。乘越の目じるしだといふその白樺は、二た抱へくらゐもある珍らしい老木であつた。それは岩の上に根をおいてゐた。昨日の夕方その木を見た時の嬉しさが胸にかへつて來て、もう一度見たくなつたのである。

その白樺は、こゝからは一部が見えるだけで、木下から仰いで見た感じとは遠いものであつた。

『見ないはうへ、』と思つて、私は脊梁の線を、まだ見ない、烏帽子岩のあるはうへと辿つて行つた。

辿つて行く脊梁は、次第に崖の緣となつた。脊梁を境に、半分は崩れ落ちてしまつたのである。崩れは、次第に深く、次第に廣くなつた。そしてそちらを見おろすと、岩の持つ光りで眩しさを感じる。こちらの半面は偃松に蔽はれてゐて、渡るには、幹から幹へと足を移さなければならない。

一つゞきの偃松は、緩やかにうねりくだつて、又うねり上つて、その果に小高い岩山を持つてゐる。

『あれが頂上だらう。』

私はさう思つて、靜かに歩みを移して行つた。

岩を傳つて下ると、そこには偃松が絕えて、低い草と花の咲いてゐる高山植物の生えつゞいたところとなつた。そして、崖と反對の側には、この峰の瘤とも見えるやうな小さな丘が並んでゐた。

その丘のはうを見た私は、見た一點を見詰めさせられた。

私の脚もとから、細い、一本の竿の曳く影とも見える影が、草生の上を伸び〳〵して、四五間、六七間も伸びて、その丘の斜面を這ひ上つてゐる。そしてそこに一つの圓を映して盡きてゐる。その圓を中心に、徑一間もあらうかと思はれる虹が立つてゐる。空に見るやうな色彩の多種なものではなく、僅かに青と赤ぐらゐではあるが、それは丘の斜面の青い、幾分の靄を含んだ上に、持つて行つて置いたかのやうに、ぢつと、にじみ加減になつて映つてゐるのである。

『何だらう？』と私は一と目見た時には怪しんだが、すぐに、自分の影の外の何物でもないと心附いた。しかし、さうした影を眼にしたことのない私には、珍らしいといふよりは不思議なものであつた。

私はその影を眺めてゐた。薄れもしず、消えもしず、いつまでも映つてゐる。

『佛像の光背は、多分これを取つたのだらう。』

私はさう思つてそこを離れた。少し歩みを移して、又そちらを見ると、そこにも同じものが映つてゐる。又行つて又見ると映つてゐる。又映つてゐる。

離れまいとするやうに見える、虹を負つた自分の影を、私は何回見たことであらう。

遠く望んだ岩山へ、私は一人で登つて行つた。赤い岩の積み重ねであつた。ところ〴〵に偃松があり、高山植物が咲いてゐた。

登りつくして見ると、私はその先に、今一つ、前よりもやゝ深い偃松の下りがあつて、俄に高まつてゐるその高まりの頂點に、一つの大きな岩の立つてゐるのを發見した。それはこゝへ來るまで、全く見なかつたものである。

『あれが烏帽子岩だ、』と心附いた。『行つて見たい、』と思ふと共に、それに要する時間が、この場合私に許されるものか何うかを考へなければならなくなつた。

私は暫く岩山の頂に立つてゐた。

『あ、』と私は聲を立てた。思ひ懸けなくも雷鳥が一羽、私の直ぐ前のところにあらはれた。茶色の、鳩ほどの、丸い形をした、今は飛ぶことを忘れた鳥は、偃松の實を喙んでゐたが、喙み飽きて遊んでゐるところと見える。

雷鳥は私を見たやうだ。だが、逃げようとはしない。高山の偃松のなかにばかり住んでゐる鳥

は、人間といふ生物の、何ういふ感情を持つてゐるものかを知らないやうだ。その鳥は、偃松に沿つた岩のあひだを、無器用な恰好をして、歩きながら、下のはうへ、はうへと、見えなくなつて行つた。

立ちつくしてゐる私の眼の前に、今度は小さな獸があらはれて來た。それは二錢銅貨ほどの大きさの顏を持つた、茶色の毛をもつたものであつた。その獸は、偃松の下から走り出ると共に、その顏をまともに私に向けた。痩せた、眼ばかりの顏のやうに私には見えた。見えると直ぐに隱れてしまつた。

『栗鼠のやうだつた、』と思つたが、しかしからだは見えなんでしまつた。

この二つの小さい生物のあらはれは、私を微笑させた。私は消え去つた形を眼の前に保つて、一人で微笑してゐた。

後ろから人が聲を懸けた。それは堀君といふ、東京の學生であつた。小林君と同じく、案内を共通にしてゐるところから同行してゐる人である。堀君も烏帽子岩へ登らうとして來たらしかつた。

無口な、それが似合はしいやうな表情を持つた堀君は、今も微笑をたゝへながら後ろを振り返つた。私もそちらを見ると、小林君と案内と一しよに、偃松の上を渡つてこちらへ來る姿がかつきりと見えた。

堀君も、小林君と同じやうに立派な登山家であつた。私はさつき見た影のことを堀君に話した。

『それが本當の御來迎つてものださうです。めい〳〵自分の影を見るだけで、側にゐても人のゝは見えないんですつてね。』

堀君はさういつて說明してくれた。

躊躇してゐた私は、この人たちが來たので、烏帽子岩へと向つた。

岩の肩までの登りが困難であつた。木立にさへぎられてゐる岩の面は、殆ど直立してゐた。怪我をしないやうに注意して登つてゆくと、私は最後になつてしまつて、堀君の姿は見えなくなつた。

肩まで這ひ上ると、岩のそちらの面は、崩れになつて、深さはすぐには測り難いものに見えた。烏帽子形の一つ岩は、その肩の上に、かなりな高さをもつて立つてゐるのである。

『あちら側から見ると、この岩が「槍の穗」のやうに見えます。』

案内はさう云つて、四つ這ひになつて、攀ぢ登つてゆく。

小林君は、這ふことは出來なかつた。鞍に跨つた形になつて、手と尻でゐざりながら進んだ。

私は小林君のするやうにする外はなかつた。

案内は或點に立ちあがつて、私たちのゐざるのを見てゐた。ゐざりながら案内を見あげると、その赤黑い顏は、眞つ靑な空のなかに浮んでゐた。

そこをゐざり盡すと、私たちは崩れの上に直立してゐる、滑らかな花崗岩の面を傳はらなければならなくなつた。

『こゝを何うして傳ふだらう?』と私は怪しんだ。

先に立つた案内は、岩の面にからだを擦りつけて、兩手を一ぱいに擴げて岩に抱きつくやうにした。岩の面は廣くて、擴げた手も向うへは廻らない。又、岩の面は滑らかで、指の懸かるほどの突起も窪みもない。足はと見ると、そこには、岩の面に一と筋の筋がついてゐる。その筋の上へ、屈めた足の指を吸ひつかせつつゐざらせつゝ進むのであつた。案内のからだの下には、足の下には、深い〳〵崖が空に向つて擴がつてゐる…

案内が傳つてしまふと、小林君が傳つて行つた。

私も傳はらなくてはならなくなつた。私は、今眼に見た光景と、心に感じた不安から離れようと思つた。草鞋をその筋の上に踏みかけ、兩手を擴げて岩の面に抱きついた時、私は眼を、その向つた一點に注いで、それより外は何もない場所と思はうとした。私の下腹には力が入つて來た。私の足の爪先は、靜かに、伸び屈みしつつ進んで行つた。それと共に、岩に擦りつけてゐた腹もゐざつて行つた。

手の指が岩の曲り目を捉へた。

堀君は、岩の絕頂の、僅かに尻を据ゑうるやうな所に馬乘りになつて、例の微笑をたたへてゐた。

私たちは、下りはちがつた面を取つた。上るとしては、前の面よりも困難に見えた。

露營地へ歸つて來ると、一切の荷造りは出來て、人夫は待ちくたびれたやうな顏をしてゐた。

今一つのテントを使つてゐる學生の一組は、學生も人夫ももう見えなかつた。

案内は腹掛から時計を出して見た。

『ちやうど一時間半かかりました。』さう云つて、案外時間のかかつたのがをかしいやうに微笑した。

『よかつたよ、』と私は横山君と本居君とに、一しよに行かなかつたのを惜しむ心で云つた。そして本居君に、『君の槍ヶ岳のやうだつて云つた、あれが烏帽子岩なんだ。』

荷を脊負ひながら、それを聞いた案内は、

『知らない方は、大抵あの前の山で歸つてしまひます。――この人夫だつて、行つた者はないでせう、』と云つた。

一行は一列になつて歩み出した。向つて行く山の、朝の光に輝いてゐるのを見ると、心のすべてがそちらへ流れ出すのであつた。

烏帽子岳より赤岳へ

休んでゐるあひだは、互に健康を氣にしあつて、疲れたとか、眠れたとか眠れなかつたとかを問題としたが、歩き出すと、全くさうしたことは口にしなくなつた。爲て見たからとてここで何うしよう。倒れて動けなくなるまでは歩みつづける外はない道である。それに、私の氣分のさわやかさと、冒險に向つてゐる心とは、しぜんにさうしたことを忘れさせもした。

山上の午前は概して雲がないといふが、その日は殊になかつた。明け方だけは概して見られるといふ雲海さへも見られないほどになかつた。私たちの眼には、空と、山の峰との、いひ難い靜かさをもつて、靜かにかがやいながら相對してゐるのが、視力の及ぶ限りは、明らかに見えるのであつた。

『この踏んでゐる足の下は、一萬尺の高處だ。』さう心に思ふと、まさしくもそのことが描かれて

來る。そして異常なところにゐる時の心の緊張を感じて來る。だが、親しく眼に見てゐる周圍は、私たちのゐるところよりも、一段と高いので、それは單なる思想として、すぐに心から消えていつた。南に向つて進んで行く一行の東に當つて、餓鬼、燕が、その暗綠の蜂を空に擡げてゐる。やゝ遠く大天井が見えてゐる。西には、近く赤牛が、その腹這つた背をうねうねと續けて、やゝ遠く藥師がその一面を見せてゐる。そして私たちの足もとには、岩の上に偃松が綠に這つてゐて、ところどころに眞つ白な高山植物の花が咲いてゐるのである。靜かに踏む岩の一つ一つは、大きく、賴もしく、そして傾斜もゆるやかである。

『道が附いてゐるのかね。』縱走者の辿る道は、しぜんに附いてゐるのかも知れないといふ氣がして、折柄一しよに歩いてゐた案內者に聞いた。

『尾根へ絡んで行くのです。』案內者は笑顏になつて、きまりきつたことを子供に訊かれた大人のやうな口調で云つた。

尾根に絡む、私はその言葉の意味を辿つた。道はない、尾根に、卽ち頂上を貫いてゐる線に離れないやうにして、離れなくてはならない時には離れもするが、大體としては添ふやうにして行く、さういふことだらうと察した。道はないのだと知つた。そして、絡む、うまい表現をするものだと心で感じた。

道は樂ではあつたが、しかし直ぐに暑くなつて來た。昨日の經驗で、上着は歩き出す時から人夫に預けたが、暫くのあひだはさすがに寒かつた。それが、間もなく暑くなつて、ただ一枚の夏シャツがまた汗に濕り出すのを感じた。

私たちの前には、可愛いい丘があらはれて來た。丸い丘と、岩を綴つてゐる偃松とが、距離の關係から全景となつて眼に入つて來た時には、大きな築山を見るやうな感を起した。

『三ツ嶽です、』と地圖を見た横山君は敎へてくれた。そして笑ひながら、『一萬尺に近いんですよ。』

私は笑つた。冗談のやうに聞えたからである。

三ツ嶽の上に立つて前方を見ると、やゝ遠く一つの山を見た。それは、大きさはこの山に較べられる程度のものではあるが、眞つ白な色をした山である。落ちついた、安らかな感じを持つてもゐた。山の頂に、大きな岩の三つ四つが、一かたまりになつて立つてゐるのも、はつきりと見

えた。その山には、遠く見ると雲の影の落ちたのかと思はれる例の偃松のつくる隈はなかつた。

『五郎です、野口五郎です。』と横山君はいつた。

野口五郎といふ名は、その名の奇拔なところから、私の記憶にもあつた。それは私たちの越すべき山であることも知つてゐた。

山の名はいつ誰が附けたのかは知らないが、この日本アルプスの大抵の山の名は、人間生活に直接なものが多い、知識的な名など一つもない。多分は獵師などが、その形から聯想して、ちやうど若い學生が他人に綽名を附けるやうな心から附けたものであらうと思はれた。それにしても五郎も、黑部も、野口も、何ういふところから思ひ寄せたのであらうと、輕い面白さを感じた。

三ツ嶽から野口五郎まではかなりの道のりがあつた。いつか私は、横山君と二人(ふたり)になつて歩いてゐた。

道は崩れの上に出た。山と山との鞍部は、今その一半を切り取られて、深い谷は直ちに崖となつてゐるのであつた。そこには偃松があつて、崖の上の、私たちの歩いて行くべきところを蔽つてゐる。私たちは、足もとに深い崖を見下しながら、足場の定まらない偃松の上を涉つて行くのであつた。

遠く、微かに、夢を思ひ出すやうなほのかな瀨の音が、耳に入つて來た。その音は、あたりの無聲を今更のやうに心附かせた。私は耳を澄まして、その音の起るところを知らうとした。水の音だと、それは私たちの足の下に展けてゐる谷間より外にはあるはずがない。私は谷間を見下した。谷に滿ちてゐる明るい靜かな光線は、遠い底までも見せた。しかし私の眼は、あれば見えるべき谷川の白いきらめきを認めることが出來なかつた。

『何處(どこ)から來る音だらう?』私は横山君にさう云つた。云ひつつも、微かな音といふよりもむしろ、無聲の境にする寂しい、心惹かれる音に耳を澄ましてゐた。

横山君も耳を澄ましてゐたが、

『偃松のなかからですよ、』と云つた。

さう云はれて私は偃松に耳を集めた。崖に沿つて這つてゐる偃松のなかに、まさしくその音はあつた。しかしそこには風はなかつた。搖らぎやすい松の葉の一と葉さへ搖らいではゐないのであつた。それでゐてそこには音があるのであつた。微かな、極めて微かな、風といふよりは空氣

の流れといふ方が適當なものがあつて、その偃松の繁つた葉のなかを通りつつ、その葉によつて起す音なのであつた。

『寂しい音だね。』

私はさう云つて、更にあたりを見た。日光は明るく靜かに、岩山を、谷を、偃松を照らしてゐる。無聲を展べてゐる。寂しい音は、無聲そのものの息のやうに、絶える時のない息で、今も續いてゐるやうに聞えてくるのであつた。

一行は野口五郎の頂上へ集つた。人夫は荷をおろした。ここで晝飯を食べるのであつた。

遠く見て眞つ白だと見た山は、そこに立つとそれほどではなかつたが、大體としては白かつた。頂上に簇らがつて立つてゐる岩はやゝ大きくて、そして山全體に、荒涼な感を添へてゐた。案内者の撰んだ場所は、その岩を超えた、南に向つて傾斜したところである。汗の流れてゐる體ではあるが、腰を据ゑて休むと直ぐに寒さを感じて來るので、成るべく日あたりのよい場所をと撰んだのが直ぐに察しられた。

眞上にある太陽は、その白い岩山に光線を直射させて來た。疲れた兩足を岩の上に投げ出してゐる私は、眼を伏せると、眼の前の岩から反射する光線の眩しさを感じた。私は眼で傾斜を辿つた。白い岩石は、遠ざかるほど白さを加へつつ、何處までも傾斜して行つた。そこには眼を遮ぎる大きな一つの岩も、その色を亂す偃松もなかつた。

眼がとどまるところに、私は紺青色をした、圓形の、かなり大きいものを發見した。何だらうと怪しんだ。しかしそれが太陽の光線を反射してゐるのを見ると、池だと察した。そこに池のあるのは、考へて見ると不思議はなかつた。けれども南に向つて割合に暖かさうなその邊には、もう雪は殘つてはゐなかつた。一つらに白い岩が光つてゐるのみである。そのなかにさうした池のただ一つあるのを見ると、ちやうど山の空に向つて見開いてゐる眼のやうに思へて、やはり不思議な感をさせるのであつた。

鳶が啼いた。空の上に啼く一羽の鳶であつた。久しく鳥の聲を聞かない氣のする耳に、その聲は高く聞えた。無聲の岩山の岩に反響するやうに聞えた。

一行は圓くなつて晝飯を食べた。人夫は何處からか雪と燃料とを持つて來て湯を沸かした。冷たい飯と湯とは、ここでは最上の馳走である。それに饑ゑてゐない譯でもなかつた。しかし、た

のしい食事といふには、寂しさが過ぎた。寂しいといふには親しさがあり過ぎた。

『燕が近くなつた、』と誰かゞ云つた。饑鬼はもう後ろになつて、遠く見えた燕が大きく現はれて來た。赤牛はまだその背を續けてゐる。だがその大部分は、そちらに聳えてゐる赤い岩石の山に隱されてゐた。それは今夜の露營地である赤岳であつた。

食事が濟むと、案内と人夫とは例によつて書寢を始めた。

私たちは眠れさうな氣もしなかつた。疲れが少しやはらぐと、私は起つて、獨りで其邊をうろついた。ぢつとして坐つてゐると、私の心は重くなつて來た。名附け難い氣分が、胸に湧いて、澱んで、重さを感じさせるのであつた。そしてその重さは變化して來さうであつた。何う變化するかは私は知つてゐた。それは理由のない感傷的の氣分である。そして起つて來るのを壓へることも、起ると紛らすことの出來ない感傷的の氣分である。

私は獨りでうろつき廻つた。持つてゐた幾通りかのシガーを頻りにすつた。寒さはシガーをただ苦い味にしてしまつた。

一行は野口五郎の傾斜を下つた。眼下に、近く見えてゐた紺青いろの池は、下つても下つても近くならなかつた。そしていよいよその側を通る時には、尾根に沿つたと見た池は、かなりの距離を持つてゐるものとなつた。

そこで、私たちは休息をした。

『あ！何だらう？』と不意に呟きながら、宮角力を取る人夫は、その眼を見張つて、遠い一點にぢつと定めて、口を大きくあいてゐた。

『あの偃松の上の所、あ、上へ動く。』

人夫はみんなそちらを見詰めた。

『お、何かゐる。』

『熊のやうだな。』

さう云つて、眼を動かさずに見てゐる。

視線と、偃松といふのとで、それは野口五郎の上とは察しられた。私もそちらを見詰めた。眼鏡をかけた私の眼には、白くきらめく傾斜の長い山と、その上に隈となつてゐる偃松と、霞んだやうな岩とが見えるだけで、熊といふ言葉から黑い點を想像して見たが、何所にもそれらしいも

のはなかつた。

『たうとう見えなくなつてしまつた。』

『たしかに熊らしかつた。』

人夫はさういふと、またもとの無心にかへつて、その眼を眼の前の山に向け出した。

南に向つて伸びてゐた尾根は、今、西へ向つて曲つた。曲ると共に俄に峻しくなつて來て、そして私たちの頭の上には、眞つ赤な岩石の山が切つ立つて來た。やゝ傾いて來た太陽は、その眞つ赤な山を、或る部分はきらめかし、或る部分は暗くしてゐた。

『赤岳の登りだけが少し……』と、朝、道の様子を尋ねた時に、案内者が氣の毒さうにいつた、それを私は思ひ出した。

登りにかかると、私は甚しく困難を感じ出した。『この頂上まで行きさへすればいいのだ。』さう思つて私は、靜かに歩かうときめた。私は呼吸と歩調とを一致させて、眼に入つて來る岩から岩へと踏み登つて行つた。

登りの或處へ行つた時には、今まで大きな一つづきの赤い岩肌を、黑く、小さく、一列になつて、醜い動物のやうに動いてゐた連中を見失つてしまつた。振り返つて見ると、横山君が一人、アルペンストックを突いて、ぽつりぽつりと動いて來る姿が見えた。宮角力を取る人夫が一人だけ、腸らしく、これは平氣な様子をして跟いて來るのが見えた。

『待つてやらう、』と思つて私はそこに立ちどまつた。

『何といふ道だらう、』と私は、今立つてゐるところを見廻した。足を踏みかける岩にだけ眼を集めてゐる私は、さうした岩より外には多く注意することが出來なかつた。足もとから眼を放して周圍を見ると、私は自分の體を置いてゐるところに、或る驚きを感じずにはゐられなかつた。

そこは尾根ではない、尾根の死骸であつた。といふのは、山の兩側の山腹は全く崩れ去つて、削り取り、剜り取つたやうな形になつてゐる。谷の深さは、眼は屆くが、すぐには測り難いまでに深い。そして一様に、茶褐色といふよりはむしろ赤い色をして、きらめきつ曇りつしてゐる。そこは尾根には相違ないが、全く尾根の死骸のやうな感を持つてゐた。そしてこの尾根の死骸は、立ちどまつて仰いで見ると、驚くべき峻しさを持つてゐるのが、一本の木立もない爲にまざまざと見えるのであつた。

『案内者が後に注意をしなくてさつさと行つてしまふのは、ちと亂暴だ。』私はさう思はずにはゐられなかつた。

横山君は一しよになつた。顏を見合せたが、私たちは云ふこともなかつた。

人夫が來ると私は、

『君が先へ立つて呉れ、』と私が賴んだ。周圍を見過ぎた私は、この場合、さうしてもらうのを慰めに感じるまでの心にされてゐた。

『全くここはひどいんです。』さう云つて人夫は先に立つた。そして振り返り振り返り足を移して行つた。

狹い尾根の上には、ところどころに大きな岩が突つ立つてゐた。小さな岩でも道一ぱいになつて避けるところのないものになつてゐた。私たちは岩に抱き着いて、體を移して行く外はなかつた。

『大丈夫ですか。』一つの大きな岩を越すと、人夫は立ちどまつて、後に續いた横山君をぢつと見ながら云つた。横山君は無事に岩をめぐつた。私はその後に續いた。

岩に抱き着いた私は、今、右足を進めると、左足を、大きく、岩に觸れないやうにと加減して移した。それでも左足の股のところが岩に觸れた。ちよつと觸れたと自分では感じたが、そこに物の裂ける音がして、そして股に痛みを覺えた。岩を過ぎて見ると、私のズボンも、ズボン下も、刄物で切つたやうに裂けて、そして股はかなり長く切られて、紅く血の滲み出してゐるのを見た。

『手袋をはめて居なからうものならとても歩かれない、』と云つて、私は手にはめてゐる木綿の厚い手袋を見た。僅かのあひだ岩に縋つた爲に、その手袋はかなりまで擦れてゐるのを見た。

頂上へ着くと、すぐ眼の下の、四方とも小高くなつた一つの窪地に、もうテントを張つて、焚火をはじめてゐた。狹い場所に、三つのテントと三つの焚火の煙を立てながら燃えてゐるのが、さみしくも親しいものに見えた。

露營地に續いて西に、土手の高さを持つてゐるところに登ると、私は前面に、雄大な、落ちついた、そして素朴の感を持つた、いはゞ巨人の胡座をかいて休んでゐるやうな山を見た。今朝、遠く一面を見た藥師である。赤牛はもう黑岳の後ろに隱れてしまつて、今はそちらへ眼を放つて、一面を見るやうになつてしまつてゐた。

私の立つてゐるところは山腹ではあるが、傾斜は極めてゆるやかで、丸々として、ところどころに高山植物の白い花を持つてゐた。そして谷は深くはないやうに見えた。その谷の、やゝ南寄りの谷の展けたところに、私は一つの奇妙な山を見おろした。それは山とは云つても、小さな山を横斷して、一劃の平地としたやうなものである。自然にあるものとしては如何にも人工的な感を持つてゐて、第一印象としては奇妙と感ぜざるを得ないものである。が暫く見てゐると、それが何かの形に似てゐると思つた。が何であるかは思ひ得なかつた。後(のち)になつて、それは『蜘蛛(くも)の平(たひら)』といふのだと聞いて、さう云へばそんな形にも見えると思つた。

露營地の南の方は、極めてゆるやかな傾斜をもつて高まつて、遠く何處までも續いてゐるやうに見えた。そちらには偃松が繁く生えてゐるのが見えた。

北の空には、峰つづきに、一つの高い峰が聳えてゐた。この山の岩は茶褐色であるのに、そちらは黑いのが異樣に感じられた。黑岳といつて、峰には水晶の小さいのが少なからずあると聞いた。

今まで見えなかつた同行の堀君は、焚火の側へあらはれて來た。靜かな微笑を浮べながら、

『黑岳へ行つて來ましたよ、』と云つて、上着のかくしから細かい水晶を掴み出して、手を擴げて見せた。つまらない水晶のやうに見えた。

『もつと大きいのはないんですか。』

『あるかも知れないが、岩をかく道具がないから分りません。』

『どつさりあるんですか。』

『えゝ、』と堀君は微笑してうなづいた。

居合せた小林君は、

『僕も行つて見て來よう、』と好奇心をそゝられたやうに云つた。そして私たちの顏を、『何うです、』と誘ふやうに見た。

疲勞は私たちの好奇心を封じてしまつてゐた。私は默つてゐた。小林君の姿が見えなくなつた。

横山君は、寫眞機を持ち出して、レンズを彼方(あちこち)此方に向けてゐた。

『藥師を背景に、一枚いゝのをとつて呉れないか。』

『光線が何うか知ら、』横山君は胸にあてた小さな寫眞機へ覗き込みながらいつた。

ここへ着いた時には、まだ日がかなり高くて、岩も草も光つてゐた。暮れるに遲い夏の日は、暮れるまでには相應なあひだがあるやうに思はれた。それがいつのまにか暮れかかつて、眼をとめて見ると、光は空だけのものとなつてゐる。そしてその空も、青ざめて、晝の盛りの光で見る時の活き活きした力を失つてしまつてゐた。

露營地へ着いて寢るまでのあひだは、卽ちぢつとして山に向つてゐられるあひだは、一日の中で一番山嶽氣分の濃くなる時である。危險な道を歩いてゐる時は、山は足の下に縮まつて來て、山と足の下とは一つものになつてゐた。仰ぎ、見廻して見る山は、偉力を示してはゐるが、此方の張り切つた心には、その偉力は恐ろしいものとはならずに、むしろ美しく耀かしい誘惑的なものに見えて來た。それが、ぢつと動かずに見てゐると、山は限りなく大きく、靜かに、その反對に自分は極めて無力なものとなつて來る。そこには寂しさに似た感がある。その寂しさが、單なる寂しさでなく、淸らかさを持つた寂しさなので、一種の快さとなつて受け入れられるのである。

夜は今、薄靄のやうにあたりに漂つて來た。テントの側で人夫の焚いてゐる火は、次第に赤い色を加へて來た。見ると、人夫は夕飯を食べる支度をしてゐる。

その時である、何所かへ遊びに行つてゐた關西の學生の一行は、揃つて、騷ぎながら、南の方の偃松帶の方から近づいて來た。

一番大きな青年が、手に何かを握つてゐる。外のものはそれを珍らしがつて、覗いて見ようとする。大きな青年は手を差し上げて見せ惜しむやうにしてゐる。それが影繪のやうに見えながら、私たちの側まで來た。

『何です、』と私は大きな青年に訊いた。

『雷鳥の雛です。』

『いけませんよ、』と私は强く首を振つて、そのことの惡い意を示した。『叱られますよ。』

本當は私は、叱られるか何うかを知らなかつた。直ぐに感じたのは、何れはおもちやにして殺してしまふにきまつてゐる、それが可愛さうだ、と思つただけであつた。

『いけませんか、』とその青年は關西訛りで、慌てて訊いた。その眼には呆れた色が無邪氣な色と一しよになつて現はれた。『何うしたらいいでせう。』

『何うつて、爲方がないな。放しておきなさいよ。』

青年は、何所へ放したらいいだらうといつたやうに、まごまごして、手に握つてゐる雛を眺めた。

横山君は側から、

『そこいらに置きやいいでせう。あの石の上がいい。可愛さうに、』と云つた。

青年は云はれた通りに、少し先の、低い草の中に高く見える、一つの石の上に置いて來た。

焚火を圍んだ時には、案内者は一團の者の氣を兼ねながらも、しかし確りとした口調で、雷鳥を捕つてはならないこと、分らない積りでも何うかして分つて、案内者が迷惑することを云ひ渡した。

學生連中は、默つて、困つた顏をしてゐた。

『あの雛、何うなるだらう、死にやしないか知ら。』

私は氣にして云つた。人夫の一人は、

『親鳥が搜しに來ますよ、鳴き聲で分るんです、』と云つた。

食事が濟んで、そろそろ寢ようといふ時であつた。山はすつかり暗くなつてしまつて、空は靑黑く高くなつた。赤く燃える生木の焚火を圍んで、私たちは沈默がちになつてゐた。あたりには何の音もなかつた。

ぴよ、ぴよ、といふ聲が、遠く微かにした。その聲はみんなの耳に入つた。

『雷鳥の親が搜しに來た、』と一人がいつた。

みんな其方に耳を集めた。

ぴよ、ぴよといふ聲は續いて起つて、そして闇の中をさまよつてゐるのが聞えた。近くなるかと聞くと、遠くなつて行つた。

『雛が返事をするといゝんだ。敎へてやりやうもない。』

私たちはさう云つて、親鳥を可愛さうにも、雛の居場所の分らないのをもどかしがりした。

『今に分るだらう、』とも云つたが、それは自分を慰めるに過ぎないといふ氣がした。

翌朝、眼が覺めて、テントから這ひ出すと、私たちは雛鳥を置いた石のところへ行つて見た。雛はゐなかつた。その邊を見廻したが、何所にもその姿は見えなかつた。

寒い、寒いと、みんな肩を窄めた。

『水が氷つてゐた。昨日溶けたのが、氷つてしまつた。』

雪溪へ顏を洗ひに行つたものが、さう云つて歸つて來た。

堀君はサックの中から寒暖計を出して見た。

『東京の酷寒ですね、』と云つた。

『今夜はもつと寒くなります、』と案内者は、得意なやうな顏をして行つた。

昨夜、大事にして焚き餘してあつた偃松の生木は、白い煙を立てて、黎明のさわやかな空氣のなかに燃え出して來た。

赤岳から硫黃澤乘越まで

一團の者は赤岳の露營地を立つた。

道は小起伏の上に伸びて行つた。朝の脚は誰の力も同じなので、みんな揃つて歩いてゐた。山上の露營も二た夜になつたが、いつも私は眠ることが出來たので、朝の氣分は輕かつた。

岩の上を、新しい穿き心地のいゝ草鞋で、露にぬれた高山植物の花を踏むまいとするだけの餘裕をもつて、靜かに私は歩みつゞけてゐた。

私の胸には、昨夜の露營地の樣が殘つてゐた。それが現はれつ消えつした。私は名殘を惜しむやうな氣がした。

『草鞋を穿いて歩く旅びとだけの經驗する味だ。』私はそんなことを思つた。

かなり歩いて來た時である、同行の小林君は、つと立ちどまつて、

『しまつた、』と云つて、眼を空の一點に据ゑた。『杖を忘れてしまつた。』

何うしようかと小林君はちよつとの間迷つたらしかつたが、すぐに、『取つて來ませう、』と云つて引つ返さうとした。

人夫の一人が、

『私が行つて來ます、』と云つた。

『それは氣の毒だ、自分で行かう、』と云つたが、人夫は案内者の、行つて上げろといふやうな顏を見ると、何も云はずに氣輕な風にすぐに引つ返した。

『燒判がどつさり捺してあるもんで、』と小林君は、諦めかねる心持を、やゝ極り惡るさうに說明した。

登山家が方々の山を突いて歩いて、記念の判をどつさり捺してある杖を惜しむ心持は、私たちにはたやすく察しられることであつた。

私たちの前面には、鷲羽がその頂を見せて來た。それは遠く望むと眞つ白であつた。昨日見た野口五郎の白さよりも白かつた。近づくに隨つて、その形の痩せて、淸らかなのが分つて來た。

野口五郎は圓く肥えて、力を見せてゐたが、これは細く痩せて、淸らかに見えた。

鷲羽の登りは僅かであつた。花崗岩の細かい碎けが、草鞋の下で微かに鳴つた。しかし下りは、急で、長かつた。明るい谷を眼の下に見ながら、何時までも下つた。下りにかかると、大抵の者は登りよりも脚が勞れるといつたが、私にはそれがなかつた。私は下りは何でもないものに思つた。しかし鷲羽の下りだけは、たやすいとは思はなかつた。

下り切ると案内者は荷をおろして休んだ。

『何うです、鷲の羽根のやうでせう。』一人の人夫は、惚れ惚れと見上げて、相手を求めるやうに云つた。

彼方で見た時よりも、此方で、山の全容を見上げる今の方が、鷲羽はその持つてゐる美しさを十分に見せた。

火山風の圓錐形をした、傾斜の急な、眞つ白な、そして偃松の一本も持つてゐない鷲羽は、今、適當の距離を置いて見上げると、淸らかさそのもののやうに見えた。雲のない眞つ青な空は、その山を覆つて、遠く伸びてゐた。

赤岳から硫黃澤乘越まで

『鷲羽つて、全くうまい名を附けたものだ、鷲が羽根を擴げたやうだ。』人夫は續けてさう云つた。彼の胸にはその二つの類似が比較されてゐるらしいが、私には、鷲の羽根を擴げた姿は想像が出來なかつた。

『あの、蜘蛛の平なんかも、此頃は雲の平だなんていふが、蜘蛛ですよ、此方から見ると、蜘蛛の脚をひろげた恰好にそつくらだ。』

その人夫は樂しさうに云ひ續けた。案内者は笑顏になつて聞いてゐたが、外の人夫は、耳を假してゐるとも見えなかつた。

そこからは、昨日越した野口五郎が、青空を背景に、はつきりと見えた。澄みきつた空氣は、そこにある偃松も、岩までもそれと見せた。

鷲羽の裾を離れると、私たちの前面には、幾つかの峰が重なつてゐて、何の尾根へ出ようとするのか、何方へ向はうとしてゐるのかも見當がつかなかつた。しかし東南にあたつてゐる鎗と、北の鎌尾根といはれてゐるその北へ延びた背とは、次第に大きさと、荒さとを加へて來るので、一行の向ふ見當が附くだけであつた。鎗の南に續いてゐる穗高は、鎗の奇峭に對して雄偉を發揮して、それを次第に濃厚にして來た。

道は尾根を離れて、山腹の、傾斜のゆるい、平地かと思はれるところへ續いて行つた。

展望のきかない路は、俄に心の緊張を失はせた。しかし、そこには尾根では見られない細かい變化はあつた。

路は、偃松つづきの、濕地のなかへ伸びて行つた。そこは雪溪の溶けたあとだと分つた。泉があつて、清らかな水が黃いろい枯草の上を氣味惡く流れてゐた。私たちは草鞋を濡らし、すべりながら歩いた。路の曲り目に來て、振り返つて見ると、遲れた横山君と本居君との姿が眼に入らなかつた。人夫を先にやつて待つてゐると、偃松のなかに、路を發見することができずにあちこちしてゐる二人の姿を認め得て聲を懸けた。

路は、赤い岩山の屏風を立てたやうに立つてゐて、そして山腹はすべて雪溪になつてゐるところへ出た。私たちは雪溪を渡らなければならなかつた。大町から用意して來て、一度も使つたことのないガンヂキを、本居君は草鞋に結びつけさせて面白がつて渡つた。雪の上を歩くことは本居君は恐らく初めてだらうと思つた。

緩い傾斜と、黃いろい枯草と、小さい雪溪と、視線を遮る山腹と、その繰り返しは間もなく私の心を厭かせた。烏帽子の森林帶をたどつてゐた時に似る陰鬱が、私の心を捉へて來た。

私たちの歩いてゐるところは、三又蓮華と、双六の山腹と、双六平だとは分つた。しかし、全容を見ることのできない蓮華と双六とは、何の魅力もないものであつた。

陰鬱に慣れて、その感じも失つて來たころ、路は登りになつて來た、そして再び尾根へ出た。

鎗と穗高は眼の前に、面を撲つて聳えてゐた。その南に、やゝ遠く燒岳が見えて、噴煙もそれと見せた。乘鞍も、めづらしくその全容をあらはして、七つも八つも續いてゐる峰を空に横にうねらせた。私たちの傳つて來た尾根は、今、その纖細な方面を隱して、偉大な方面だけを現はして來たやうに見えた。傾いた日は、その峰々を、赤く、黑く、暗綠に、しかし一つの耀しい色にしてゐる。

暫く足をとめて見渡してゐた私は、溜息をついた。すばらしさは物をいふことを許さなかつた。尾根の、何の掩ふものもない、空と谷とに露出された地點に、焚火の跡があつた。ここが露營地か知らと、これまでの露營地には似ないので怪しんだ。しかしそこが硫黃澤乘越の露營地であつた。

人夫は荷をおろした。

日はまだかなりあつて、暮れるまでには間のあることを思はせた。

鎗ヶ岳西の鎌尾根

人夫はそれ〴〵のテントの側で火を焚いて朝飯の用意をしてゐる。火は白い煙をうづまいてゐるだけで、赤く燃え立つては來ない。こゝには生の偃松があるだけで、焚きつけになるだけの枯木もなかつた。その偃松も、かなり遠くまで行つて伐つて來たもので、昨夜の殘りの僅かゞあるだけである。

曉の寒さは、昨日の朝より强かつた。みんなスウェターを着た肩をすぼめて默つてゐる。私の煙草は苦い味をもつてゐた。

焚火の煙を避けて、みんな傾斜を踏んで一段高いところへ上つた。上つて行つた者は、みんな西の方を眺めた。默つて眺めてゐる。いつまでも動かずに眺めてゐる。

『完全な雲海ですな！』と小林君は云つた。

實際、宅全な雲海だ。私たちのテントを張つてゐる峰からやゝ下つた谷に起つてゐる雲は、遠く、燒岳、乘鞍岳、その先にまでも、眞つ平に續いてゐる。そして眞つ白である。その上には、一ところの暗い隈もない。凪ぎ渡つた海のやうだ。いや寧ろ雪に蔽はれた平野を見渡すやうだ。いや、海でも野でもない、そこにはかうした渺茫とした趣はない。やはり雲海だ、完全な雲海だ。

『何うです、まるで盆景のやうだ。』

一人がさう云つて指ざしたのは燒岳である。燒岳はそこから眞つ正面に、かなりの距離を持つて立つてゐる。昨日の夕方もその噴煙は見えてゐた。しかし噴煙と知つたゞけで、美しいものではなかつた。今見る燒岳は、雲海の上に、その腰から上をかつきりと浮び出させてゐる。側には何も置かずたゞ自分だけを浮び出させてゐる。そしてこゝから見える燒岳は、紺いろをしてゐる。その紺いろの中から、幾筋かの白い煙が、濃く薄く、眞つ直に立ち昇つてゐる。曉のうす青い空を貫いて、柱でも見るやうに立つてゐるのである。

燒岳を前にして、やゝ西に寄つて、乘鞍岳が、同じく眞つ白な雲海のなかに、その紺青の大き

な姿を蟠らせてゐる。こゝで見る乘鞍岳は、松本平から見える圓い寛やかな姿とはちがつて、幾つもの、七つ八つもの峰を持つた、嶮しい、亂れた形をもつた山である。

しかし全體として見えて來る光景は、云ひ難い靜かさと美しさとをもつて統一されてゐる。その靜かさと美しさとが、曉の光で見るためであるといふことは、誰も感じてゐた。うす青い空は、幾分かづゝ輝きを加へて來る。雲海もそれと共に輝きを含んで來る。その輝きの或る程度まで加はつて來た時には、くづされ消されてしまふべき美しさである。

私たちの眼は、近く、東の方を劃つてゐる鎗ヶ岳から穗高岳の方へと移つて來た。それは今日行くべき山である。烏帽子岳の頂へ立つた時から、目じるしとして望んで來た山である。時には見え時には隱れて、小さく、遙かなるものに見えたのであるが、今は眼に近く、そして空の一方を塞げて聳え立つてゐる山である。

穗高岳！　何といふ威嚴を持つた山だ。その青黑い裾を大地の底深く据ゑて、空に溢れあがり盛りあがつた山は、中腹以上はすべて眞裸の赤岩をしてゐる。そしてその赤岩の峰を幾つかに分つて、起伏させてゐる。その尖つた峰、峰から峰を續けてゐる狹い尾根は、空に亂して捧げてゐる刄物のやうな鋭さを持つてゐる。上高地から見た穗高岳は、威容を持つてゐた。威嚴と共に品位を持つてゐた。こゝで見る穗高岳は、威嚴といふよりも威力その物である。大地のつゝんで持つてゐる限りない力が溢れ出して、そのまゝ空にとゞまつたがやうである。

鎗が岳！　何といふ奇怪な姿だ。これは南から北へ亘つた、屛風を立てたやうな山だ。山といふよりも山脈だ。こちらの面は、削り取つたやうな崖で、そしてその面は直ちに硫黃岳、硫黃澤となつて、一面の赤をまじへた黃いろい谷である。頂のない山は、鎌尾根といふ名をそのまゝに、大鎌の刄のやうな尾根を空へ向けてゐる。その尾根の上に据わつてゐる「鎗の穗」は、こゝから見ると、奇怪の上に重ねた奇怪なものに見える。曾て上高地から登つて見た「鎗の穗」は、自然と安らかさとを含んだ奇怪であつた。これがあの鎗ヶ岳かと思はせる。しかも雲海は、私たちのゐる硫黃澤の尾根を境として、穗高岳の裾には及んでゐるが、鎗ヶ岳の方にはかゝつてゐない。私たちの眼には、鎗ヶ岳は今、蔽はれた一部もなくその奇怪を曝け出してゐるのである。

人夫は食事を告げた。

草鞋を尻に敷いて坐り、土の上に食器を置いての私たちは食事を始めたが、横山君だけは手を

振つていらないといふ心を示した。昨日ごろから横山君は食が細つてしまつてゐた。『味噌汁のかをりを嗅ぐと、もういけないんです』と、手を胸のところへやつて見せた。一日はげしい勞働をしてゐながら、食慾が起らないといふことは、私たちに取つてはよほど異常なことに感じられた。家にゐる時ならそれもたいしたことではないが、こゝでは、一時間も餘分の休憩も許されないこゝでは、周圍の者には大きな問題に感じられるのであつた。

案内は不安な眼をして、側から横山君の顏を見てゐたが、その重い口をあいた。

『あがらなきやいけませんね。』

年寄の人夫も、昨夜白水を棄てゝに於いて特に横山君の足を洗つてくれた人夫も、當惑の色をそのやさしい眼にあらはした。

『昨日からあがらんないんだから、それぢやあ――』

『大丈夫だ。』と打消して横山君は笑顏をつくつて見せたが、その笑みは優しい顏にさみしく漂つただけであつた。

『少しでも食べるといゝ。』と私も勸めた。

『果物を食べませう。』

と云つて横山君は、一つ二つ殘つてゐたパイナップルの鑵を切らせて、それを抱へて食べ出した。

穗高の縱走はあきらめよう、と私は思つた。それは東京での豫定には入つてゐなかつた。大町でさうきめたのも、いゝ案内をえようとしての横山君の駈引であつた。しかし歩いてゐるうちに、それは望ましいことになつて來た。小林君と堀君の二人は初めから行くことになつてゐた。その人たちにくらべると、私の足はまさしく弱い。だが、我慢をしたならば、何うやら同じことが爲きれようといふ自信が持てた。案内も、『あなたは大丈夫です』と保證をした。それは、私の足をいたはつて靜かに歩くのをいゝとして云つたのではあるが。

行かう！　と私は心できめてしまつた。問題となつたのは本居君であつた。だが足は私よりも強い、行かれるだらう、と思つた。横山君は問題にしなかつた。これは私たちのあひだでは登山家だから、問題以上だとしてゐたからである。その横山君が駄目だと分つた。私たちの穗高は見合せるべきだ、と今日になつて心がきまつた。さうきめると、私の心には、惜しいといふ思ひは

少しもなかつた。

私たちが食事をしてゐるうちに、今まで一しよに旅をして來た學生の一行は、もう出懸けてしまつた。この一行は初めから、直ぐに上高地へ下ることにきまつてゐたのである。こゝから上高地までは、一日路としては長過ぎる。餘程早く立たなければ、夜に入つての林道を歩かなければならないことになると云はれてゐた。

その一行の人夫の一人は、荷を背負つて起つて、出懸けようとしながら、

『皆さま、長々お世話になりました。』

と云つて、鉢卷へ手を懸ける眞似をした。

『氣を附けてね。』

と案内は挨拶を返した。

この簡單な別れの言葉が、かすかではあるが寂しい氣分を漂はした。

行き着くべきところの見えてゐることは、かなりまで私の心を輕くした。食事がすむと直ぐに、私はたゞ一人で歩き出した。

眼をあげると、鎗の「肩」と「穗」とは、前面を遮つて立ち塞がつてゐる。近くはあるが、それに合せては著しく高いので、路の嶮しさが思はれた。「鎗ヶ岳西の鎌尾根」といつて、難場の一つだと云はれてゐるのが思ひ出される。しかし、それは眼をあげて見た時のことで、私の眼は、一と足を踏み出す毎に、その踏むべき岩を注視しなければならなかつた。私の前には、次第に高まつて行く岩と、偃松と高山植物の連續があるだけで、その外の何物もない。私は朝の輕い草鞋で、露のまだ干てしまはない白い清らかな岩を、靜かに踏んでゐるだけであつた。

硫黄のかをりが感じられた。私は歩みをどゞめた。瞰下す谷は、私の眼を打つた。そこは硫黄澤を直下に瞰下すところであつた。一いろの、赤のまじつた黄と見たのも、やゝ間隔を置いて望んだ時には、それとこれと融け合つて、やはらかい色を帶びてゐた。今こゝで眼下に見ると、この赤と黄とは互に反撥し合つて、ぎら〳〵と光り合つて、山と谷とを、異樣な光の淵としてゐる

『霧か知ら――』と、その谷の底の一點から立ち騰つて、くずれずにゐる眞つ白いものを見た。しかし、霧にしては濃過ぎ、かたまり過ぎてゐるその物を、硫黄の噴煙であると直ぐに氣がついた。

私は前後を見まはした。鎗ヶ岳は、奇怪な相貌を加へてゐる。さつきまでは、遠く、小さく、一列になつて見えてゐた人夫の一組は、何所の岩へ隱れたか見えなくなつた。後ろの方は、露營地があの邊であつたらうと思はれるだけで、人の姿は見えない。そして私の立つてゐるところは、狹い、尖つた尾根の上で、偃松のあちら側は、首を伸して見ると、やはり斷崖であるのが見える。

しんとしてゐる。靜まりかへつて、聞えて來る何の物音もない。眼の前の偃松の葉に、朝の光線がしみて、一と葉一と葉を光らせて、淸らかにしてゐるだけである。遠く、かすかに、何とも分らない音が耳について來た。耳を澄ましてゐると、まぎれつあらはれつする。そして同じ調子を繰り返す。『溪流の音だ』と思つた。その音は、胸にしみて、そこでも鳴り出して來た。

尾根は高まり、うねつた。私の一人の歩きは久しく續いた。

息切れがしだした。それだけになつてゐる薄いシャツは、汗で濡れて冷たくからだに觸つた。私は踏んでゐたところへ腰を下した。

私のからだの下は、嶮しい傾斜を持つた谷である。花崗岩の細かい崩れは、茶を帶びて、瞰下す眼と共に何所までも續いてゐる。向うには、靑い山が一つ、その腰から上を他の山から離して全容をあらはして此方に向つてゐる。その形が如何にも安らかである。今まで奇怪な山ばかり見てゐた眼は、その安らかさを快く感じた。

私は一心になつてその山に向つてゐた。よく見ようとするのでもない、形を覺えようとするのでもない、全く何の思ふところもないのであるが、それでゐて一心になつてゐられるのである。それが快く感じられるのであつた。

人の氣はひが感じられた。本居君であつた。落ちついた、樂しさうな顏をしてゐた。やはり一人で來たのである。

本居君も並んで腰を下した。二人は云ふこともなく、前の山を眺めてゐた。

暫くすると、案內を先に一行が來た。

「あれは、何て山だらう?」

『笠です、』と案內は答へた。

飛驒の笠ヶ岳だ。烏帽子岳を離れて歩き出した頃、連峰の上に、ちようど小さな笠を置いたやうな紺碧の山を、あざやかに望んだ。聞くと「笠だ」と敎へられた。その「笠」を眼の前に見たので

あつた。

歩きながら堀君は云ひ出した。

『僕、あの、鎌尾根を歩いて見たいと思つてるんですがね。』

さう云つて、鎗の「穂」から北へ伸びてゐる尾根を見やつた眼には、微笑の中に熱意が閃いてゐた。

「行つた者がないんですか。」

『えゝ、』と案内者は引取つた、『あすこに、渡れない谷がありまして。』

そこへは誰も行つた者がないのであつた。

この一行の中には、横山君はまじつてはゐなかつた。人夫を見ると、全部ではないので、後になつて一しよに來るものゝあることは察しられた。

私は振り返つて見い〳〵した。尾根は上りになつて來るので、展望は利いた。今歩いて來た尾根は、斷崖と斷崖との頂きを縫ふ一線となつて、際やかに眼の下にうねつて行つた。だがその何所にも人の姿は見えない。

『横山君を待たうぢやないか、』と私は本居君に云つた。

私たちは又そこへ腰を下した。

『横山君が若し歩けないとしたら。』一行の一人として私たちはさういふことも考へなければならないと思つた。案内は、如何なる場合にも、一定の歩調で歩いてゐる。今横山君が歩けなくなつたとしても、その爲に行程を變へるやうなことはしなさゝうに見えた。多分、それはそれとして、他の人夫に托して、先へ行つてしまふだらう。人夫は何れ程まで當てになるだらうか。さし當つて横山君が何うしてゐるのだらう。

本居君は、偃松にすがつて傾斜を下りて行つて、そこに耀いてゐる雪渓の雪を、水呑の中へ取つた。私も下りて行つて同じやうにした。喉がかわくか、遊びのほしい時には何時もしたことである。

雪も食べてしまつて、手持無沙汰を感じる頃であつた。私は又、そちらの方を見ると、ひよつくりと横山君の姿があらはれた。

『よかつた！』と思ひつゝ私はその姿を見守つた。そこは、こゝからはかなりな距離を持つてゐ

る一つの小高い岩の上である。黄いろい旅行服に、鍔の大きい鳥打帽子をかぶつた、そして手に、長いアルペンストックを衝いた小柄な姿が、その岩から俄に生まれ出たやうに、ひよつくりとそこにあらはれたのである。

横山君の姿は、そこにあらはれると同時に、そちらに展がつてゐる光景の中心となつた。下は斷崖である。上は青空である。斷崖は赤く白く光つて、遠く光りつゞいてゐる。青空は耀いて、すぐその岩の上に垂れてゐる。その眞ん中に、あらはれて見えてゐる横山君は、小さな、動くとも見えない、さみしい一つの物と見えるのであつた。

私たちは暫く、横山君の姿を目で迎へつゝ近づくのを待つてゐた。しかし容易には一しよになりさうには見えない。そして横山君の後には、人夫の一人二人が見える。一方、案内の一行は、もう私たちの眼からは隱れてしまつて居た。

『出懸けよう、』と云つて私と本居君とは起つた。

一つの尾根がうねると、俄に眼界が改まつた。仰いで望んでゐた「鎗の穗」は、面して見るやうになつた。それと共に、立つてゐるところは、やゝ大きな石ころの積み重ねとなつて來た。日に照る石ころは重なり高まり、重なり高まりして、直ちに「鎗の肩」までも「穗」までもつゞいてゐる。

そこには、何所もさうではあつたが、路がない。人の通つた足あとをも殘してはゐない。踏む一と足に注意がいつた。十足に息が切れた。立つて歩むところと、手を伸ばして岩に縋つて登るところとは相半ばして來た。

谷底に、薄白く霧があらはれた。霧は山の肌に沿つて這ひあがつて來る。這ひあがると共に廣くなつて來る。見る間に霧は、谷の全體を埋め、私たちのゐる山を蔽ひ、穗高岳と鎗ヶ岳とを隱してしまつた。私の見るものは、眼の前を過ぎてゆく小さな雨の雫である。それが南から北へ、はげしい速力をもつて飛んでゐるだけである。

私たちは歩いた。立ちどまつてゐるに堪へないやうな氣がして、足もとを見詰めながら歩いた。自分のする息の音が、高く耳に聞えた。その高く調子をもつた音が、心に響いて來る。

『あれが「鎗の穗」か知ら?』

本居君がさう云つた。霧のなかに、奇怪な形をした、それかと思はれる大きな岩が、たゞ一つ

黑く峙立つてゐる。「穗」にしては餘り近いやうである。だが、「穗」以外にさうした高い岩のあるのを今まで見なかつた。或は「穗」かも知れない。

歩み出さうとして足もとを見た私は、思はず目を見張つた。今まで見えなかつた山肌は、霧とのあひだに僅かの間隔ができて、幽かながら、眼にとめられる程度に現はれ出してゐる。何といふ深さだ！足の下に續く山肌は、霧の海を穿つて、そこに辷り入り辷り入りしてゐる。五百尺、千尺、二千尺と辷り入つてゐる。その最上端の一つの石を踏んでゐる足は、おのづからに力が入れられた。

私は足もとの小石の幾らかを、草鞋で蹴落した。石は石と觸れて、鋭い、寂しい音を立てゝ落ちて行つた。その石は直ぐに隱れたが、音だけは後までも續いた。

暫くすると霧は移つて行つてしまつた。

「鎗の穗」ではないかと怪しんだ岩は、まだかなり下にある、しかもさして大きくはない一つの岩に過ぎなかつた。まことの「穗」は、霧を纏つて、頭の上にかぶさつて立つてゐるのであつた。

『おうい！』と、不意に後ろから高く呼ぶ聲がした。振り返ると、人夫の二人ばかりが、廣い山肌の上に黑く小さく見えた。

『下！』と、同じ聲が續いた。

路を下へ取れとの注意だと聞いた。私たちの前には大きな岩が積み重なり、立ち塞がつてゐる。下といふのは、路を下へ取つて、その岩むらの裾を廻れといふことであらう。しかし目じるしの「鎗の穗」はこの岩むらの眞上に見えてゐる。この岩むらを攀ぢ登るのが、最も近い路に相違ない。

私たちは、これまでも度び〳〵したやうに、一つ〳〵の岩を攀ぢ登つて行つた。足を懸けうる岩には、手の懸かるところがある。足と手と懸かれば攀ぢ登れる。一つの岩から一つの岩へと、私たちはそれを繰り返した。

眼の前に岩がなくなると、そこには「鎗の肩」が横たはつてゐた。案内の一行は、今そこへ登りつかうとしてゐるところであつた。

私はたうとう鎗ヶ岳の肩へ立つた。こゝは大町を踏み出す時から、心の中では絶えず目當てとなつてゐたところである。それといふが、七八年前、この肩へ立つた時の印象が心にとゞまつてゐて、をりをり眼の前にあらはれあらはれして、今は一種の親しみを持つたものとなつてゐるか

らである。

私はあたりを見渡した。「鎗の穗」、「鎗の肩」、頂に近く崩れの岩の嶮しい續き、その下の大雪溪、すべてはそのまゝである。同時に、すべてはかなりまでに違つてゐる。そして、何が違つてゐるのかは心に捉へられない。私は暫く眺めてゐた。眺めてゐるうちに、違つてゐると感じたものは、次第に薄れてやはり此通りだつたといふ氣がした。

一行は晝飯を食べてゐた。私もそこへ並んで坐つた。

穗高岳へ登る者と、登らない者とは、こゝで別れるわけである。堀君と小林君とは無論登るのである。私と本居君とは問題とされた。

『何うです、登りませんか？』

側にゐた小林君はさういつて勸めた。

『如何です、』と案内も云つた。『あちらの方は何ですが、あなたなら大丈夫です。』

穗高はよさう、ときめた今朝の心持が、今一度繰り返された。

『止しませう、仲間があんなですから。』

『しかし、殘念ですね、』と小林君は熱意のある眼で私を見た。

いつか又、と云ひたかつた。しかしそれは言葉とはならなかつた。重ねて穗高岳へ登る爲にこへ來る、さうしたことは今後あらうといふ氣はしない。私は默つて、小林君に笑顏をかへした。

人夫の穗高へ登る者と登らない者とも分けられた。手筈が附くと、例の食後の長い休憩が來た。

何所へか行つて來たやうに堀君がそこへ現はれた。

『穗へ登つて來ましたよ。』

『僕らも登らうと思つて、仲間を搜してゐるところなんだ。』

『も一度登つてもいゝんです。』

私は二三人の者と一しよに、「鎗の穗」へ登り出した。前の時には、烈風で、案内が登らせなかつたので、初めて私は登つて見るのであつた。

三百フィートの高さをもつた、殆ど直立してゐる岩も、少しの危險の感もなく登りえた。『これ程のところは何度も歩いて來た。』といふ氣がした。

午後になれば起ちがちな雲は、今日は殊に深く起つてゐた。見渡す四方はすべて雲で、そこに

は遠い一つの峰もなかつた。

私は岩の端まで行つて見た。硫黄岳と硫黄澤とが今一度見えた。それは足の眞下に沈み擴がつてゐたが、はつきりとそれを認める前に、私は足の裏のこそばゆくなつて來るのを感じた。私は急いで身を退かせた。

私は暫くそこに立ち續けてゐた。が、「穗」の上は、下で見上げて想像したやうに、樂しい感じを私には與へなかつた。

一時間ほどすると私たちは別れた。

『明日の晩また上高地で、――お大事に。』

案内を先に、横山君のアルペンストックを借りて衝いた背の高い堀君、小柄な引き締つたからだつきをした小林君、それに人夫の三人が續いて、鎗の尾根を南へと傳つて行つた。

私たちは、默つて、靜かに、下り口を取つた。眼の下には、崩れから出來た大きな岩の河原が續いた。それを越して、前に來た時にはなかつた二つの小屋の屋根が小さく寂しく見えた。その下には、大雪溪が、嶮しく、長く、日に光つて續いてゐる。

ぽつり、ぽつりと、小さく、黑く、登つて來るらしい人の姿が見える。

『全く仲間以外のものゝ顏を見なかつたね。』

私はさう云つて、後ろから來る横山君を振り返つて見た。横山君は頷いて微笑した。そして、『あの小屋へ行つて見ませう、何かあるでせう、』と樂しさうに云ふのであつた。

鎗の肩より鎗澤へ

鎗は私に取つては舊知の山である。私は八九年前に、上高地からここへ登つた。その時の印象は、斷片的ながら胸にはつきりと殘つてゐる。少年の頃、木曾の御嶽へ登つた外は、山らしい山に登つたことのなかつた私には、鎗は私に忘れ難いまでの印象を與へたのであつた。

鎗の下り口に立つた私は、眼にその樣を見おろすと共に、胸にあるはずの印象を喚び起して、それとこれとを比較する味ひを味はうとしてゐた。

大きな石の積み重ねからなる峻しい傾斜、それに續く、幅の廣い、何町にも續く、僅かの絕え間を持つた雪溪。私の胸にあるものは、今まさしく眼の下に展べられてゐる。しかし、ここに實在してゐるものに較べて、私の胸のものの何といふ見すぼらしさであらう。大體としては略々似てはゐるが、私の胸のものには、今この、私の全身を威壓して來る力を、殆ど持つてゐない。

岩を踏んで見下してゐると、この踏んでゐる足と、踏まれてゐる岩とに不安を感じて、心を鎭めて堪へてゐる、この威壓する力を全く持つてゐない。十年の時は、私の記憶を、生氣のない、單なる形としてしまつたのである。

單に形としても、思つてゐたよりは遙かに大きい、と私は思つた。力を忘れると共に、形までも私は小さくしてしまつたのだと心附いた。形と云へば、その時には、あの見える坊主小屋はなかつた。あすこにあつたのは、小さな、三四人のものより外は入れない窟に過ぎなかつた。さう思つて私は、遠く岩のあひだに、白い小さな屋根を見せてゐる小屋を見おろしてゐた。

『坊主へ行つたら何かあらう。』といふのは、横山君の樂しみであつた。食慾を失つてしまつてゐる横山君は、何か變つたものを、せめては好物の蕎麥粉を得て、蕎麥がぎでも食べたいと云つてゐた。私にはそれは得難いやうに思へた。（土地の者は、旅の者の珍重するやうな土產には、重きを置いてゐないものだ。）しかし何かはあらうと思つた。

小屋へ寄るのは私たちにはかなりな廻り道であつたが寄つた。そこには私たちの持つてゐる物以外には殆ど何もなかつた。學生が二人、泊り込んでゐるらしく、精悍な氣を顏に漂はせながら、

窓から外を眺めてゐた。私たちは登山者らしく、互に默禮をかはした。

私たちは雪溪にかゝつた。本居君はガンヂキを附けたが、私は附けなかつた。此前登つた時には、私はさうした物のあることさへ知らなかつた。誰も草鞋だけでこの雪溪を上り下りしたのであつた。だが雪溪を踏み始めると、私は草鞋の足のすべつて留らないのに當惑した。『あの時は夏のさ中だつたので、雪がもつと柔らかだつたらう。これでは疲れる、』と思つて、私もガンヂキを附けた。

雪溪の上に、前後左右ことごとく雪で、日光にまぶしく耀いて、急勾配で、限りなく遠く續いてゐるのを足の下に見ると、離れて見てゐる時とは感じがすつかりちがつた。

私は一と足、一と足、注意して下る者となつた。本居君は、杖をついて、同じくあぶなげにして下りた。

食料は殆ど食べつくして、荷物の輕くなつてゐる人夫は、今は威勢のいゝものとなつてゐた。年寄の一人の人夫を除いた二人は、競爭して雪溪を走り下つた。そして私たちとは距離がやゝ遠くなつた。

ぴりぴり、ぴりぴり、と呼子笛を吹く聲が耳に入つた。それを聞くと本能的に、何かの危險を知らされてゐるやうな氣がした。私は振り返つて見た。すると直ぐに後に續いてゐると思つた横山君が、雪溪の緣のところに坐つてゐる。年寄つた人夫がその前に蹲んで、何かをしてゐる。體に苦しいところでも出來て、その手當をしてゐるやうな恰好に見えた。

『横山君、變だ。行つて見よう。』私は本居君に云つた。そして、『おうい！』と人夫に聲を懸けて、手招きで來いといふ意を示した。

雪溪を登るのは苦しかつた。氣が急くので、一層苦しかつた。漸くに横山君の側まで行つた。

『何うした？』

『何うもしません。ガンヂキがうまく附かないんで直してゐるんです。』横山君は顏を上げて、不思議さうに云つた。

考へて見ると、私たちは誰も呼子笛などは持つてゐなかつた。ないものを鳴らすはずがない。坊主小屋の方を見ると、さつき見た學生が、窓から顏を出して、此方を見てゐるのが小さく見えた。

『私たちの恰好が惡いんで、からかひに鳴らしたんだ、』と私は氣が附いた。

いまいましい氣はしたが、しかし私たちには輕快には下れなかつた。三人は、又一と足、一と足、雪溪を下り出した。

雪溪は、三町か五町のあひだだと思つた。下つて見ると、その倍も三倍もあつた。これも私の記憶にはちがつてゐた。

『何だつてこんなに長いんだらう?』

『まだ時節が早いせゐです。』

人夫に云はれて、私はこの前とは季節のちがつてゐることに心附いた。

宮角力を取る人夫は、途中で拾つたと見えて、米俵を擴げて、廣い蓆にしたのを持つてゐた。雪溪の急な時には、それを橇にし、緩くなると手で引きずつて運んでゐた。

『拾つたのかい?』

『こんな上等があつたんです、』といつて、變な物が棄ててあつたものだといふやうに眼を落して今更のやうに眺めた。『今夜敷いてやらうと思つてるんです。』

場所に不似合な物が落ちてゐたものだと、人夫に引かれて行く蓆を私も見た。

鎗澤の小屋の前へ來た時には、私たちは云ひ合せたやうに立ちどまつた。が誰にも何うといふ決心がついてゐたのではなかつた。それは、泊るとしてはまだ早過ぎた。だが氣の緩みは、路の割合には足を疲らせてゐて、この上歩くのは無理だといふ氣がした。それに、明日日一ぱいに上高地まで行けばよいので、今日行程を貪る必要もなかつた。何よりも心を惹かれたのは、そこにある屋根のある小屋である。私たちは屋根の下に寢てみるといふことに誘惑される心を持つてゐた。』

『何うしよう?』

『さあ、』といつて横山君は、何うでもいゝといふ心を示した。

『ここで泊らう。』

私はさうきめて、人夫にそれと命じた。私たちは今はもう人夫の氣を兼ねる心はなくなつてゐた。

人夫は明るい河原へテントを張つた。蓆はテントの中へ敷かれた。

流れ木を集めて、人夫は火を焚き始めた。

河原の一方には、河水がかなり豐かな水量を持つて流れてゐた。白い花崗石の上を流れる水は、その底を鮮やかに見せながらも、薄藍色をして、そして石に觸れては白く碎けながら清らかに流れてゐる。私は汗にまみれた顏を洗はうとして、その水を手に掬んだ。水は冷やかに肌にしみた。清らかな流水は、顏を洗つただけでは滿足が出來なかつた。私はシャツを脫いで、この幾日、汗になり通しで、一度も拭つたこともなかつた上半身を叮寧に濡れ手拭で拭つた。寒さを感じたので、私は慌ててまた濕つたシャツを着た。

小屋から食料を買入れて來て、私たちは晩飯を食べた。山は兩方から迫つてゐる。坐つてゐる身には、流れは眼に平らに、そして水音も高く聞える。花崗石の河原には、河柳が茂く立つてゐる。夕方の微光は、その上を靜かに包んで、暫くは暮れさうにもなく見せてゐる。

『かうした晩飯は今日きりだね。』私は箸を動かしながら、やゝ感傷的の氣分になつて云つた。

給仕をしてゐた人夫は引取つて、

『何にしても天氣つゞきで、有難いことでした。これだけのあひだ、一度も雨に逢はないつてことは珍らしいんですよ。降つて御覽なさい、それはひどいんです。』

西の鎌尾根が私の眼を掠めた。

『あの路で降られちや事だね。』

『えらいの何のつて、』と宮角力の人夫は圓い眼に熱意をあらはした。『降るとなると、風がきつと一しよなんです。下から降り上げるんですからね。』

人夫は或時の風雨のすざまじさを委しく話した。かうして、他人と接しる機會の少ない人の話は、その人だけの心遣りの話に陷つて行きがちである。私たちは嵐の話に耳を假しながらも、靜かに移つて行く微光の、河柳の青葉に、流れの白泡に光るのを樂しむ者となつてゐた。

テントは六人で寢るには狹過ぎた。（今までは外のテントに寢せてもらつた。）人夫だけをテントに寢せて、私たちは小屋の方に寢ようと思つた。

ここには、近頃個人の經營してゐる小屋の外に、今一つ、以前から、登山者に提供してゐる小屋があつた。私たちは先へその方を見に行つた。その小屋は岩窟へ多少の設備をしてはあるが、しかし床を設けてあるほどではなかつた。汚くは見えなかつたが、陰氣なのと、土の上へ寢るの

が私たちを躊躇させた。小屋の入口に、文句を刻み附けた石が立つてゐた。旅びとの持つ好奇心から、私は讀んで見た。小屋の修繕が一人の寄附から出來たものだといふこと、その人は丸山盛雄氏だといふことが記してあつた。その人は、私の中學の同級生で、今も年始狀の取りやりはしてゐて、機會があつたら逢ひたいと思つてゐる人である。

『思ひ懸けなく丸山君の好意に預かるとこだつた。』

私の胸には、十代の、中學生の制帽を被つたその人の顏が浮んで來た。無邪氣に戯れをし合つたことが思ひ出された。が、今、縣下で有力な人となつてゐるといふその人に就いては、ただ噂を聞くだけで、何も眼にはしてゐないので、私の感じる丸山君は、一中學生に過ぎなかつた。私は今一度、その石を見た。單純な記實の文句も、私にはものものしい、不似合なものに感じられて、おのづから微笑が浮んで來た。

私たちは、個人の經營に成つてゐる小屋へ泊つた。それは一と間きりの家であつた。家族の住んでゐる圍爐裏ばたを彼方にして、此方には、二列に床が敷いてある。床といつても一枚の、濕りを帶びた蒲團である。その床はあらましふさがつてゐた。私たちは成るべく端の方へ、薄暗くて、顏も分らない人の頭へ、自分の頭を接しるやうにして横になつた。

圍爐裏で焚く薪の煙は、小さい、窓の少い家へ立て籠めた。

『は！　だから云はねえこつちや無え。』

誰か小聲で何か云つたのに對して、破れるやうな聲でかう云つた。それを切つかけに、話は何時までも續いた。低い聲は主人、高い聲は大工らしい。主人は大工の云ふことを聞かずに普請をした、それにはさうしてもいゝと思はれる理由があつた。大工は、何が何でも、自分の云ふことを輕んじてするといふ法はない、すれば屹度へまをする、今後とてもさうだ、といふのらしい。主人の、うるさいと思ひながらも、成るべくさからふまいとする口調、大工の、相手の氣を兼ねならがも自分のえらさを悟らせようとするねばつた口調、それが繰り返し、繰り返し、地方人のしつこさを持つて續けられてゐる。兩方は熱して來て、傍に人のゐるのなどは念頭にもないらしい。

『テントに寢た方がずつとよかつた。』と、聞くまいとしても耳に入る高話を聞きながら私は思つた。『ここを出てしまはうか、』とも思つたが、疲れはそれをするも懶く思はせた。が、何時か私は

出て來る疲れに引き込まれて行つた。

朝は早く眼が覺めた。テントへ歸ると、朝飯は出來てゐた。

飯炊き役になつてゐる年寄の人夫は、

『今朝はもう味噌がありません、』と氣の毒さうに斷つた。

『米は？』

『今朝のを炊くと、あと五合ほど殘りました。』

『いい度胸だね。暴風雨でも來て逗留してゐる時にや何うする積りなんだ。』

『食はなんでゐるんです、』と宮角力の人夫は云つた。

食料の一切を賄つてくれる大町の對山館の主人の計らひを、正確だと感心もし、無謀だと驚きもした。

テントを疊んで、立たうとした時である。私たちの側へ、一人の中年の男がのつそりと來た。青い顏をした、眼の光つた、神經を痛めてゐるやうな人だつた。その人は、宮角力の人夫の敷いてゐる蓆に目を着けて、

『お前、これは雪溪から拾つて來りやしねえか。』

『えゝ、』と人夫は、峻しい眼をして見上げた。

『そりや、死人を載せて運んだ蓆だ。一昨日、仙臺の高等學校の學生が、鎗の穗から落ちて卽死した、その死骸を運んだものだ。』

男の言葉には、何だつて性の知れない物なんか拾つて來るんだといふ非難の調子があつた。それを聞くと、人夫は峻しい眼は、好奇心に轉じて行つた。

『さうですか、何うして落ちたでせう。』

『何うしてかな、』と男は苦々しい調子で云つた。『此れほど人が登るが、眼の前で死んだのは初めてだよ。去年は、二人連れで、行方不明になつたのはあつたが、永いあひだで、死んだと思ふのはそれ位なものだ。』

死んだ學生に對しては、少しも心を動かさず、むしろ山を荒らされたと感じてゐるのが、その口調で察しられた。

それだけをいふと、男はのつそりと歸つて行つた。

『死人を運んだものでも結構だ、昨夜はお蔭様で暖かだつた。』

人夫は蓆の上に坐つたまゝさう云つた。しかし起つと、

『後で誰も敷かないやうにしてやれ、』と云つて、マッチを擦つて蓆に附けた。蓆は輕く燃えて、見る見る灰となつて行つた。

鎗澤より上高地へ

安易な、登山をしてゐる自分としては我ながら怪しまれるほどの氣分を今朝は持つた。それは路を知つてゐるからである。行程も、急ぐと半日路くらゐなものである。横山君は、無論私よりもよく知つてゐる譯である。

『今日はゆつくり行かう。』

さう云つて私たちは、新しい輕い草鞋で、夜露に濡れた、白い花崗石を踏んで、河原を、流れに沿つて下り出した。

この路の趣は、路が水の緣に附いてゐることである。水に沿つた路といつても、大抵の山路は、水を見おろすやうになつてゐる。水聲を耳にし、覗いて見て水を見るといふやうなのが多い。此路だけは、水邊の水草を踏み、屈んで手を伸すと水が掬へるほどに近い。それでゐて路は、峻し

い山の裾になつてゐて、見あげると暗い木蔭に、濡れた岩や青い苔を見た。路は時に、その山へ蜿り入り、時には河原へ伸び出してゐた。

私たちは、ちやうど散歩するやうに、氣儘に立ちどまつて、展けて來る流れの新しい樣に、流れを隔てて見える奧穗高、前穗高の峰に眼を放つた。荷物のなくなつた人夫は、人夫だけで團まつて、氣樂さうに、前になり後になつて歩いてゐた。

少し歩くと私は、この道は、前に來た時よりもずつと違つてしまつてゐるのに心附いた。前の時には、流れを七遍橫切つた。狹い水を涉つたことは數知れぬまでであつた。今は、水を涉らなくてはならないやうなところは、何處にもなささうだ。それが何う違つたのかは、餘りにも記憶がおぼろなので、考へて見ようとするほどの興味も起させなかつた。

二の俣へ出た。私は思はずそこに立ちどまつた。

この前はここで長い休息をした。疲れた身に水の音がなつかしく寂しくしみて、時には遠い所でする音のやうにも、時には身內でする音のやうにも聞えた。その音は今でも想ひ出せる。土手があつて、柳の大きな木が並んで立つてゐた。さう思つてそこを見ると、今は似た何物もない。

梓川の流れと、二の俣の谷から流れ落ちて來る水の落ち合ふところに、新しく綺麗な橋が架つて、築庭の一部のやうな趣を持つてゐる。餘りにも違ふので、名は同じであるが、場所は多分移つてゐるのだらうと思つた。

河原はここではかなり廣くなつてゐる。白い花崗石は、角を取られて圓くなつてゐる。河原には、川柳が老いてゐる。片寄つて流れて來る水は、柳の根を洗ひ、河原の大きな石に逢ふ每に小さな瀧をして流れて來る。薄藍の流れと、白い碎けと、同じところに同じ變化を繰り返してゐるのであるが、それを見てゐると、何時も單調は感じさせない。太陽の光線は、川柳の濃綠な葉を、青く明るくして、そしてその流れの上へ零れ落ちて、斑らの光を點じてゐる。その光も流れと共に漂ふ。

動くものはたのしい、と思つた。私たちは幾日も、動くものを見なかつたのだ。變化する音もいゝと思つた。私たちは幾日も、音らしい音は聞かなかつたのだ。

私は流れに近寄つて、流れのなかの小さな瀧の瀧壺を見入つた。薄藍が湛へられて濃くなつて行く、その移り目の美しさ、美しいといふよりも淸らかさ、私はただ貪るやうに見入るだけであ

つた。をりふし、その瀧壺に太陽の光線がさし入つた。すると、藍色をした水は、薄紫に變つて行つた。

『水が紫になる。』私は驚きを默つてはゐられずに、別なところを眺めてゐた仲間の者の方を見て知らせた。

そこから水上を見ると、流れは曲つて川柳に、山腹に隱れて行つた。そして川柳の暗綠の上に、遠く一つの峰が、かがやく綠をささげて立つてゐるのが望まれた。穗高は、對岸の川柳の上に、赤く、黑く、嚴めしい肌を見せて聳えてゐる。二の俣の谷は、やゝ細く、深くうねり入つてゐる。川下は、やゝ遠く見えて、ゆるやかにうねり隱れてゐる。周圍は廣きに過ぎず、狹きに過ぎず、ちやうどいい廣さを持つて、ここを統一した感じのあるものとしてゐる。が何よりも快いのは、そこには聊の陰鬱もなく、靜かなる明るさと淸らかさの滿ちてゐることである。

『かうしたところは、まだ幾らもあらう。』さう思つて私はそこを離れた。

私たちは向ふから來る女學生の一團を見た。みんな洋裝をして、輕快に歩いて來た。

『何處の學校です?』と私はすれちがふ時にその一人に訊いた。

『愛知の女學校です、』とその生徒は安らかな調子で答へた。

又、逢つた。同じく洋裝をしてゐた。

『女子師範です。』

松本の女子師範だらうと察した。

二人、三人の一組になつた會社員ともいつたやうな人には、幾組となく逢つた。何れも、いかにも登山家らしい服裝をして、寫眞機などを持つてゐた。

その一組は、山の裾に渡してある丸木の上を渡らうとして、渡り惱んでゐた。漸く渡つて行き過ぎると、橫山君は笑ひ出した。

『私たちも、初めて此所を行くとするとあゝでせうね。』

私も子供らしく笑つた。荒い山を歩いて來て、その上では明らかに優越者だと思ふのが、一種の快さを感じさせるのであつた。

河原の廣く、山の近いところへ來た。山は穗高であつた。

『あすこへ行つて飯を食べよう。』

廣い河原のなかに、川柳の圓く笠のやうに枝を張つたのが立つてゐた。木下は低い草が青く續いてゐた。流れは、その一劃の地を洗つて、幅廣く流れてゐた。

私たちは、草の上へ胡座をかいて、握飯を食べ、冷たい水を飲んだ。眼に見る流れと山とはもう厭いてもいゝはずの握飯を、口に甘くさせた。

『穗高の連中、何うしてゐるだらう？』

をりをり胸に浮んだことを、靜かな氣分は言葉にさせた。

『これ程で澤山ですね、穗高までは慾が深すぎる。』

横山君はさう云つた。

『さうだよ、』と私は直ぐに同意した。撰んで爲たことを悔いたくない心ばかりではなく、私たちには、今のこの心持がいいものに思へてゐた。

煙草をふかしながらぢつとしてゐる私の眼には、日光がちやうどの暖かさを送つてゐた。襟から頰へかけて、輕い痛みを感じるので、隨分日にやけたことだらうと、暖かさをたのしみながらも、をかしいやうな氣がした。

私たちのゐるところから少し上の流れのなかに、ふと黑いものが現はれた。それは漁師で、手に釣竿を持つてゐるのが見えて來た。

『岩魚釣りだ。』

『此方へ來ると買つてやるんだがな。燒かせて食べませう。』

横山君は都會人らしいことを云つて、その漁師を見守つてゐた。漁師は對岸の柳原のなかへ消えて行つてしまつた。

何んな氣分で暮してゐるだらう、と私は、その漁師の隱れた柳原の、青く日にきらめくのを望みながら思つた。

私たちは起つた。路は、流れとは離れがちに、低い川柳のあひだに續いて行つた。その道は長かつた。やゝ單調を覺える頃には、路は森林の下へと入つて行つた。

そこには見馴れた常磐木の老木が立ちつづいてゐた。をりをり、白樺の木が、その幹を目立たせた、下草はうす青く、長く繁つて、ところ〴〵に白い砂地を見せてゐるだけであつた。或木には、小さな板の札を附けて、學術上の名前を記してあつた。それを讀むと、私の想像した名とは

違つてゐた。その札は次第に多くなつて來た。

森林の樹立を透いて、私は目近く聳えてゐる赤岩勝ちの山を見た。山襞の雪を見た。

『穗高だ、上高地から見る穗高だ、』と思つた。この前、ここに逗留して、幾日もこの山を見た日の思ひ出が胸を掠めた。

路にあたつて一つの小屋があつた。前にはなかつたものである。その前を通り過ぎようとすると、そこにゐる若い女が帳面を出して署名をもとめた。

『ここが德本の麓か？』と私は心附いて宮角力の人夫に尋ねた。

『えゝ。』

『いつから出來た小屋だ。』

『もう、かなりになりませう。』

それは前にはないものだつた。

宮川の池へ行く道、といふ大きな標示棧が路に沿つて立つてゐた。前に私はそこへ行つた。山の主だといふ嘉門次の小屋も見た。嘉門次も見た。もう何年か前に死んだとのことである。池の中島に石楠の花が咲いてゐて、その枝に啼いてゐる鶯が、側へ行つても逃げなかつた。

『この池は、もつと彼方にあつたやうな氣がしてゐた、』と記憶の誤つてゐるのを思つた。

泉の上に危い橋が架つてゐた。泉の水は澄み通つて、底に生えてゐる藻の細かい葉のふるへまで見せてゐた。

『この橋を、舅と渡り惱んだことがあつた、』と思ひ出した。一しよに來た舅は、何年か前に死んでゐる。『さう云へば、この邊で私は疲れて、年上の舅に慰められたことがあつた。』

山裾になつて來た路を、私は默つて歩き續けた。一度離れた梓川がまた近くなつて、瀨の音は林を傳つて聞えて來た。あたりは眞つ青で、日光は梢の上と、樹の間を透いて一部だけ見える穗高の岩肌にあるだけであつた。

森林を離れた。私たちの前方の明るく展けた平地に、先づ橋が見えた。流れが見えた。同時に路に接して、大きな二階建の家が見えた。

『河童橋だ。これが聞いてゐる五千尺旅館だ、』と心附いた。

案内者と打合せがしてあると見えて、人夫は五千尺へ入つて行つた。

幾間かある旅館の室は、客で一ぱいであつた。帳場には、洋服を着て、椅子に倚つてゐる人が、忙しく命令をし、體を動かしてゐた。

二階の、三方とも壁で、窓のない室へ私たちは導かれた。そこからは梓川の流れが眞向ひに見渡された。穗高を背景に、繁り重なつた川柳の暗綠のあひだから、大河の趣をもつて現はれて來る梓川は、心を動かさせるものであつた。奥の溫泉まで行かうとする登山者が、橋の上へ佇んで、寫眞機を取り出すものが、暫く見てゐるあひだにも何人あつた。

『湯がわいたら敎へて呉れ。』

横山君は番頭の顏を見る度に賴んだ。私たちの第一に饑ゑてゐるものは湯であつた。湯より外にはなかつた。

待つても番頭は知らせに來なかつた。風呂場を搜して行つて見ると、もう大勢が群がつて入つてゐるのであつた。

こゝには此れだけの人がゐるのに、私たちは五日間、私たち以外の登山者の顏は一つも見なかつたことを思つた。鎗を越えて向ふへ行く者は、さう多くはないと思つた。

風呂からあがつて、眺望を樂しんでゐると、河童橋の上を、私たちの案內者が、大跨に、此方へ渡つて來るのを見た。堀君が續いた。人夫もゐた、小林君は見えなかつた。

私たちは同じ室に笑顏を合せた。（人夫は別の室へ導かれた。）

『小林君は？』

『少し遲れませう、弱つたやうですから、』と堀君は、何でもなかつたやうに云つた。餘り平氣でゐるので、私たちは穗高の樣子を尋ねて見ることが出來なかつた。

案じてゐた小林君は、しかし、思つたよりも早く着いた。

『何うでした？』

『いや、參つてしまつた！』と小林君は云つて、笑はうとしたが笑ひにならなかつた。『私は劒へも登つたが、比較になりませんね。とにかく一日半のあひだ、一尺四方の土もないんです。踏むと崩れる岩ばかりです。前には、高山植物の花を見ると可愛い氣がしたのが、穗高では、何だか反感を持つて來ましたよ。』

さう云つて、小林君は急いで足を出して、膏藥を貼つてあるところを撫ぜて見て、貼り代へを

始めた。

私たちは久しぶりで膳に向つて飯を食べた。フライにした岩魚を、珍らしいものにして箸を附けた。

堀君は落ちついて箸を動かしながら、

『えらい連中がありますよ、坊主から翌朝立つた慶應の學生が二人、僕等を追ひ越してしまひましたよ。』

堀君は競爭に負けたやうに云ふのであつた。私は默つて苦笑した。それは正しく、私たちを呼子笛でひやかした連中である。

晩飯がすむと、人夫との計算が始まつた。人夫とはここで別れるので、彼等は歸りの旅費を貰ふことになつてゐる。

荷物は、島々までは人夫が持つて行くことになつてゐる。私たちは持物の整理をした。

副食物の餘り、莫蓙、草鞋などは人夫にやつた。ガンヂキを何うしようといことになつた。

『私は記念の爲に持つてかう、』と本居君は自分の荷へ入れた。本居君には餘程めづらしいものに見えたらしい。

祝儀の禮に來た時には、案内者は、風呂へ入つて浴衣を着て、立派な棟梁か何ぞのやうに見えた。來年も供をしたいなどといつて、名刺の交換をもとめた。宮角力の人夫は、客があつて、來た路を歸ることになつたなどとも話した。

『明日の朝はお先へ立つかも知れません。御緩つくり、』と挨拶をした。

別れの挨拶だとは聞いたが、此方でもそれを返すのは早過ぎるやうな氣がした。私たちは曖昧な挨拶をしただけであつた。

翌朝、私たちの眼の覺めた時には、人夫はもうそれぞれ立つてしまつてゐた。堀君も人夫と一しよに立つてしまつたとかで、私たちは、前からの一行三人の外には、小林君が加はつてゐただけであつた。

（終）

9. 11.30

昭和九年十一月十五日印刷
昭和九年十一月三十日發行

定價一圓五十錢

著作者　東京市小石川區雜司谷町八十八番地　窪田空穗

發行者　東京市小石川區茗荷谷町五十二番地　岡村千秋

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目四番地八　一匡印刷所

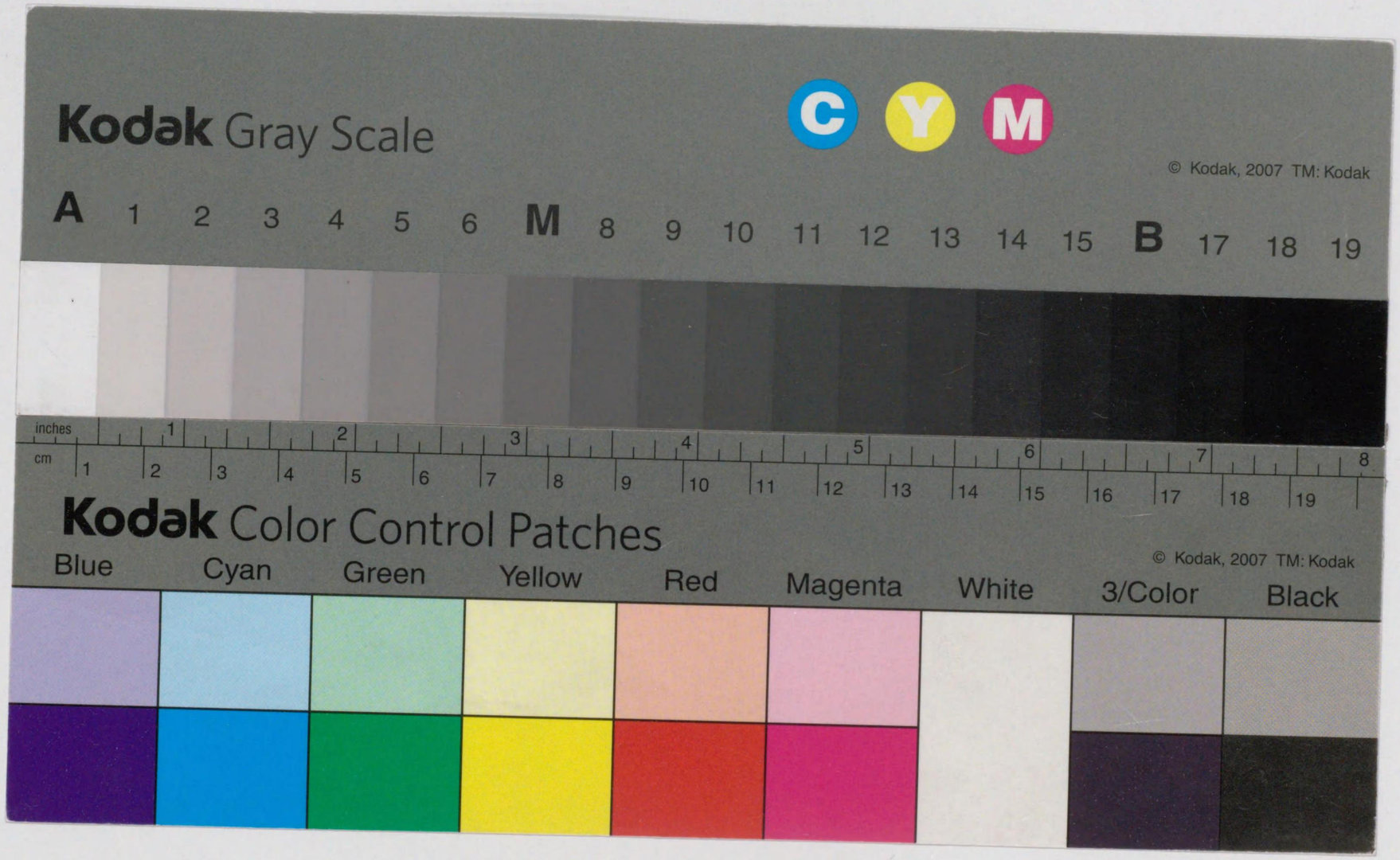
發行所　東京市小石川區茗荷谷町五十二番地　鄉土研究社
振替東京二三九一七番

版權所有

661
164

10 年 1 月 31 日

閲覧済


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black